

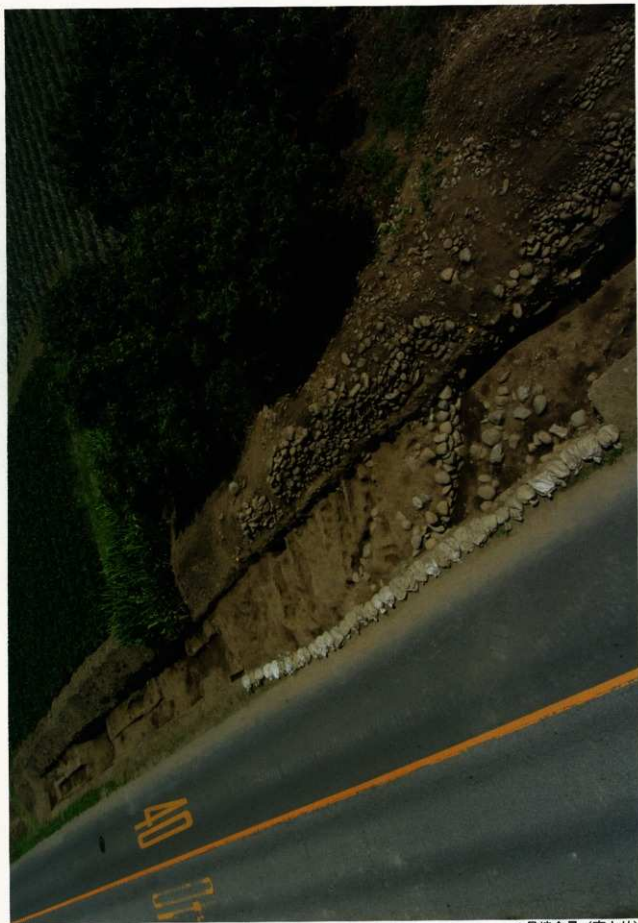
高崎市文化財調査報告書第278集

岩井諏訪前遺跡 2

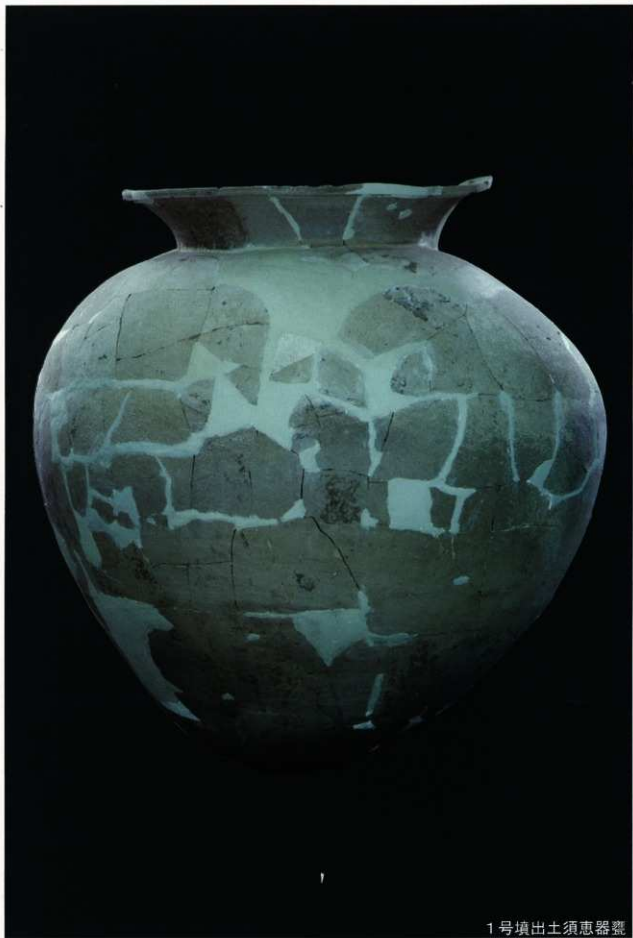
市道小暮・小串線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

高崎市教育委員会



1号墳全景（南より）



1号填出土須恵器甕



4号竖穴住居跡出土遺物

序

数度の合併を経て、平成21年6月に吉井地域を加えた新「高崎市」は、37万人の人口と460km²の面積をもつ活気あふれる都市となりました。埼玉県や長野県と市境を接し、西毛地域の大きな一角を占める高崎市は、平成23年4月に中核市へと移行します。

本書は、吉井地域における市道の拡幅工事に伴う古墳時代の集落および古墳の発掘調査報告書です。市域の南部にあたる吉井地域は、古代の行政区である多胡郡に相当すると考えられます。その建郡の経緯は吉井地域にある国指定特別史跡多胡碑に記されています。平成23年は和銅4（711）年の多胡郡建郡から1300年という節目の年となり、中核市・高崎の門出と共に、古代の高崎市をしのぶ記念すべき年です。

最後に、本遺跡の発掘調査ならびに報告書作成に多大なるご協力をいただいた地元の皆様、関係機関、各諸氏の方々に厚くお礼申し上げます。本書を通して高崎市の多様な歴史を知る一助となれば幸いと存じます。

平成23年3月

高崎市教育委員会
教育長 中島雅利

例言

- 1 本書は市道小暮・小串線道路改良工事に伴い実施した「岩井諏訪前遺跡」第2次調査の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は高崎市吉井町岩井字諏訪前111-1、130-1、131-1、132に所在する。
- 3 本遺跡には高崎市遺跡番号477を付した。
- 4 発掘調査および整理作業は高崎市教育委員会事務局教育部文化財保護課埋蔵文化財担当が行った。調査組織は以下のとおりである。
 - ・事務担当（文化財保護課）
係長・田口一郎 須田奈保子 山田いづみ
 - ・発掘調査・整理担当（文化財保護課）
山本ジェームズ 赤見義和
- 5 発掘調査期間は平成22年7月12日～平成22年9月14日、整理作業期間は平成22年9月15日～平成23年3月31日である。
- 6 本書の執筆・作成は山本が行った。
- 7 図版等の作成は山本を中心に、赤見が補助した。
- 8 遺構・遺物出土状況の写真撮影は山本、赤見が行った。
- 9 墳丘の平面測量は（株）測研に委託した。
- 10 発掘調査において、表土掘削および埋め戻し作業は（株）井ノ上が実施した。
- 11 本報告書掲載用の遺物写真撮影は毛野考古学研究所に委託した。
- 12 本遺跡の出土遺物・記録類は高崎市教育委員会文化財保護課で保管している。
- 13 発掘調査にあたり、地元関係者および高崎市吉井支所建設課にご協力をいただいた。
- 14 発掘調査・整理参加者（五十音順、敬称略）
 - ・発掘調査
狩野善夫 住谷次雄 関根折夫 善如寺陽子 信沢百合子 春山忠治 蓬田保伯
 - ・整理作業
石曾根三枝 高橋恵

凡例

- 1 本書に使用した地図は、国土地理院発行1/50000地形図（高崎、富岡）および1/10000高崎市都市計画図である。
- 2 本書中の座標値は平面直角座標第IX系国家座標（世界測地系）であり、方位は上記の座標北（G.N.）である。
- 3 本書中の図版縮尺は各図に表示している。
- 4 断面図に付した標高はT.P.を基準とした。
- 5 土層・遺物の色調および土壌の注記は、農水省農林水産技術会事務局および（財）日本色彩研究所監修『新版標準土色帖（1990年版）』を使用した。
- 6 遺構には次の略号を使用した。
SD＝溝状遺構 SI＝竪穴住居跡
SK＝土坑 SZ＝古墳
- 7 テフラ等火山噴出物には次の略号を使用した。
浅間A軽石：As-A 1783（天明3）年の浅間山噴火に由来。
- 8 本書でいう「綜覧」とは、別途註がない限り、群馬県1938『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告5』所収「上毛古墳綜覧」を指す。

目 次

序

例言・凡例

目次・挿図目次・表目次

1章 調査に至る経緯	3節 検出した遺構および遺物	10
1節 調査に至る経緯	(1) 古墳	10
2節 調査の方法	(2) 溝状遺構	16
3節 調査の経過	(3) 堅穴住居跡	17
	(4) 土坑	26
2章 遺跡の立地と環境	(5) As-A軽石充填遺構	28
1節 遺跡周辺の地理的環境	(6) 遺構外出土遺物	29
2節 遺跡周辺の歴史的環境		
3節 西浦古墳群の概要	4章 まとめ	
4節 岩井諏訪前遺跡第1次調査 (平成8年度)の概要	1節 堅穴住居跡の年代と集落展開	30
	2節 1号墳の墳丘構造について	31
3章 検出した遺構および遺物	写真図版	
1節 調査の概要	抄録	
2節 基本層序	奥付	

挿 図 目 次

第1図 岩井諏訪前遺跡周辺地形および遺跡分布図	3	第17図 3号住居跡出土遺物実測図	20
第2図 岩井諏訪前遺跡周辺遺跡分布図	5	第18図 4号住居跡平面図	21
第3図 第1次調査住居跡出土遺物および調査区全景	6	第19図 4号住居跡土層断面図	22
第4図 岩井諏訪前遺跡第2次調査全体図	7	第20図 4号住居跡出土遺物実測図(1)	23
第5図 北側調査区全体図	8	第21図 4号住居跡出土遺物実測図(2)	24
第6図 南側調査区全体図	9	第22図 5号住居跡平面図および土層断面図	25
第7図 1号墳現存墳丘測量図	10	第23図 5号住居跡出土遺物実測図	25
第8図 1号墳平面図および土層断面図	11-12	第24図 1~12号土坑平面図および エレベーション図(1)	26
第9図 1号墳出土遺物実測図	13	第25図 土坑エレベーション図(2)	27
第10図 2号溝出土遺物実測図	14	第26図 13~15号土坑平面図および土層断面図	28
第11図 1号溝平面図および土層断面図	15	第27図 As-A軽石充填遺構平面図および土層断面図	28
第12図 1号溝出土遺物実測図	16	第28図 遺構外出土遺物実測図	29
第13図 1号住居跡平面図および土層断面図	18	第29図 本遺跡1号墳と東シメ木遺跡5号墳比較図	32
第14図 2号住居跡平面図および土層断面図	18	第30図 1号墳墳丘想定復元図	32
第15図 3号住居跡平面図および土層断面図(1)	19		
第16図 3号住居跡土層断面図(2)	20		

表 目 次

第1表 岩井諏訪前遺跡周辺遺跡一覧	4	第5表 3号住居跡出土遺物観察表	20
第2表 西浦古墳群一覧	5	第6表 4号住居跡出土遺物観察表	24
第3表 1号墳・2号溝出土遺物観察表	14	第7表 5号住居跡出土遺物観察表	25
第4表 1号溝出土遺物観察表	16	第8表 遺構外出土遺物観察表	29

1章 調査に至る経緯

1節 調査に至る経緯

平成21年、旧吉井町で市道小暮・小串線の道路改良工事が計画された。事業予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、旧吉井町建設課より旧吉井町教育委員会生涯学習課に確認調査の依頼があった。

平成21年6月の高崎市と旧吉井町の合併後、担当課は高崎市吉井支所建設課（以下、工事担当課）と高崎市教育委員会事務局教育部文化財保護課（以下、市教委）に移行した。同年7月13日に工事担当課より文化財保護法第94条に基づく通知が市教委に提出された。これを受けて同年7月13～15日に市教委が確認調査を実施した。その結果、堅穴住居跡3軒と、事業予定地内に現存する古墳に伴う葺石等の礫を確認した。

確認調査の結果を受け、工事担当課と市教委との間で埋蔵文化財保護の協議を行ったが、工事担当課より事業計画の変更は困難であるとの回答を得た。現存する古墳を含めて工事による埋蔵文化財への影響は不可避とのことであったため、記録保存を目的とした発掘調査を実施した。

2節 調査の方法

発掘調査は、プレハブ事務所・仮設トイレの設置場所を確保するため、調査区を南北に分割し、まずは南側調査区より発掘調査を実施した。南側調査区での調査終了後は埋め戻しを行い、プレハブ事務所等を移設して、引き続き北側調査区を調査した。

発掘調査は、平成8年度に実施した第1次調査の成果と、今回の発掘調査に先行して行われた確認調査の成果を踏まえ、遺構が確認される深度まで重機を使用した表土除去作業を行った。遺構確認面では人力により遺構プランの検出を行い、土層観察用のベルトを設定した後、順次掘削を行った。古墳については崩落した葺石と想定される礫が地表面付近より多く検出されたため、重機による表土除去は最小限にとどめ、人力により礫の除去を行った。遺構は光波測距機や平板測量で平面図・断面図および遺物出土状況の記録図作成を行い、35mmモノクロ・カラーリバーサルフィルムおよびデジタルカメラにより写真撮影を行った後に埋め戻しを行った。

3節 調査の経過

発掘調査は平成22年7月12日～同年9月14日まで行った。以下に、調査中に記録していた調査日誌より抜粋して調査経過を振り返る。

7月12日	南区にて重機による表土掘削開始	8月9日	列石Cの1段目、列石Dを検出
7月13日	プレハブ事務所・仮設トイレ設置	8月11日	列石A、列石Bの1段目を検出
7月15日	As-A軽石充填遺構検出、調査	8月18日	南区空中撮影、SZ01の平面図委託測量
7月16日	南区遺構確認	8月20日	SZ01の墳丘を断ち割る
7月23日	SD01調査	8月27日	南区埋め戻し
7月26日	SD02検出	8月30日	プレハブ事務所・仮設トイレを移設、北区表土掘削
7月28日	SD01完掘、SD02掘削	8月31日	遺構確認。SI02～05を検出
7月30日	SZ01の崩落葺石除去	9月9日	SI04から多くの遺物出土
8月4日	SD02の北にてSI01を検出	9月14日	調査終了・埋め戻し作業、プレハブ事務所解体、撤去
8月5日	SK01～12を検出。 SZ01須臾器大礫片多量に出土		

2章 遺跡の立地と環境

1節 遺跡周辺の地理的環境

鑛川の河岸段丘 岩井諏訪前遺跡は、群馬県高崎市の吉井地域に所在する。吉井地域は、砂岩を基盤とする南側の牛伏山と、第三紀層を基盤の主とする北側の岩野谷丘陵に挟まれており、東西に細長い地形を呈している。西は北流する天引川で甘楽郡と接しており、東は鑛川と烏川の合流地点より上流約4kmで山名町と接している。南は鑛川を境界として右岸には藤岡市が立地する。

鑛川は吉井地域を蛇行しながら東流し、南北に上下2段の河岸段丘を形成している。上位段丘は鑛川河床から比高差50m前後であり、基盤は主に砂岩や頁岩からなる礫層で形成されている。上位段丘は鑛川右岸でのみ顕著であり、左岸では対応する段丘が認められない。下位段丘は、東西8km、南北1.5kmのゆるやかな傾斜を持つ広い段丘面で、河床からの比高差は10～15m前後となる。本遺跡が立地するのは鑛川左岸下位段丘の馬庭段丘上である。

吉井地域の地質 吉井地域周辺の鑛川右岸には、牛伏山を中心にアルコース質砂岩、シルト岩および礫岩により構成される牛伏層が細長く東西に分布する。鑛川左岸には、富岡市の北側に凝灰質砂岩および凝灰岩で形成される庭谷層が分布し、庭谷層の北東側には鮎川まで続く塊状シルト岩および凝灰岩を主体とする原市層が展開する。原市層の北側、烏川と鑛川に挟まれた富岡丘陵では、礫岩、砂岩、シルト岩および凝灰岩により形成される板鼻層が展開する。なお、吉井地域の中心地域が立地する上下河岸段丘はとところろ沖積地を形成しながらも、その大部分は礫、砂岩およびロームで形成されている。

2節 遺跡周辺の歴史的環境

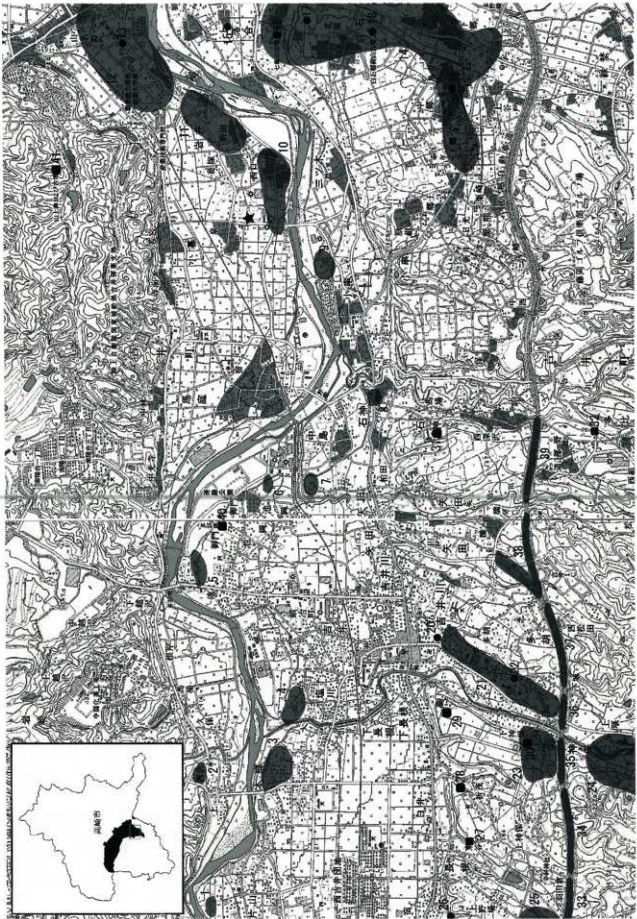
吉井地域では旧石器時代から近世に至る多くの遺跡が確認されているが、本節では発掘調査で検出した遺構に関連の深い時期に焦点を絞って概観したい。その際、鑛川流域の歴史的環境を詳細に解説した右島和夫氏の『神保下條遺跡』所収「歴史的環境」の記述に沿う。

昭和10年に実施された県下一斉の古墳調査の成果である上毛古墳総覧には、吉井地域に417基の古墳が記載されており、古墳が集中する地域といえる。吉井地域を含める鑛川流域の古墳時代は前期には、北山茶臼山古墳（円墳）、同北山茶臼山西古墳（前方後方墳）や悪行寺裏山古墳（26）が知られる。これらの古墳は比較的小規模ながら副葬品などの内容は充実していることが特徴である。

中期では全長80mの天王塚古墳（前方後円墳）が甘楽町に造られる。吉井地域では該期の古墳はあまり知られていないが、埋葬主体部に粘土層を持つ片山古墳群1号墳（1）が調査されており、豊富な副葬品が出土している。鑛川下流右岸には全長145m以上の前方後円墳・白石稻荷山古墳（18）をはじめとする白石古墳群（14）が展開する。他には白石古墳群中に七奥山古墳（16）が所在するが、該期の鑛川流域では藤岡市以外で前方後円墳は見られない。中期後半頃からは堅穴系の埋葬主体部を持つ円墳が集中する古墳群が見られはじめ、初期群集墳として捉えられよう。

後期になると、全長50m前後の前方後円墳が点在するなかで、隔絶した規模を持つ全長100mの笹森稲荷山古墳が築かれる。これは該期の鑛川流域では最大規模となる。また、群集墳に横穴式石室が採用され、中には100基やそれ以上の古墳が築造される群集墳が形成されるようになる。多くの古墳は6～7世紀代の築造で、横穴式石室を持ち埴輪を伴っている。これらの群集墳には小規模の前方後円墳を伴うことが多く、後述する本遺跡周辺の西浦古墳群でも同様である。その後、群馬県では6世紀末あるいは7世紀初頭以降は前方後円墳が見られなくなるが、依然として群集墳の形成は継続する。

本遺跡の立地する鑛川左岸では、馬庭から松木瀬にかけて古墳が点在する様子が確認でき、さらに東へと西浦古墳群、岩井古墳群など鑛川に沿って下位段丘上に古墳群が展開していく様相が看取される。次節では本遺跡直近の古墳群である西浦古墳群を概観する。



第1図 岩井諏訪前遺跡周辺地形および遺跡分布図

古墳・古墳群

番号	遺跡名	概要
1	片山古墳群	後期群集墳。総覧記載7基。
2	岩崎古墳群	後期群集墳。総覧記載6基。
3	本郷古墳群	後期群集墳。総覧記載21基。
4	塩川古墳群	前方後円墳1基、ほか7基。
5	下池古墳群	後期群集墳。20基。
6	高木古墳群	後期群集墳。7基。
7	塚原古墳群	後期群集墳。46基。
8	祝神古墳群	後期群集墳。総覧記載11基。
9	小串古墳群	後期群集墳。数基現存。
10	西浦古墳群	数基確認。
11	岩井古墳群	総覧記載16基。
12	山名古墳群	前方後円墳と群集墳。
13	山名伊勢塚古墳	全長75mの後期前方後円墳。横穴式石室。
14	白石古墳群	中・後期大型前方後円墳、後期群集墳。終末期古墳。
15	伊勢塚古墳	結晶片岩と牛伏砂岩の綱張り横穴式石室。径30mの円墳。6世紀末。
16	七興山古墳	後期初頭の大形前方後円墳。全長145m、三重の周濠か、中堤上に形象を含む埴輪列。
17	皇子塚古墳	後期大型円墳。墳長径30m。石室は一部切組積み。環頭大石や豊富な埴輪や出土。
18	白石稲荷山古墳	中期の大型前方後円墳。全長140m以上。後円部の縁部からは石製模造品などが出土。
19	喜蔵塚古墳	終末期の方墳か。凝灰岩と牛伏砂岩の載石切組積の横穴式石室。
20	吉井川浅間塚古墳	詳細は不明。堅穴系埋葬主体部の可能性が指摘される。
21	多胡古墳群	後期群集墳。総覧記載91基。
22	多胡薬師塚古墳	径約25mの終末期円墳とされる。横穴式石室には牛伏砂岩を使用、一部に切組積。
23	神保古墳群	後期群集墳。総覧記載63基。

24	塩古墳群	後期群集墳。総覧には北の塩Ⅰ古墳群13基、南の塩Ⅱ古墳群12基が記載。
25	安坪古墳群	後期群集墳。総覧記載44基。
26	恩行寺裏山古墳	中期の径約40mの円墳。
★	岩井諏訪前遺跡	本報告

集落・その他

番号	遺跡名	概要
27	折茂Ⅲ遺跡	古墳時代後期の集落。
28	折茂東遺跡	古墳前～後期、平安時代の集落。
29	南原遺跡	古墳時代前期の集落。
30	南高原Ⅳ遺跡	古墳時代前期の集落。
31	入野遺跡	古墳時代前・後期の集落。
32	東沢遺跡	古墳後期～平安時代の集落。
33	長根羽田倉遺跡	古墳前期～平安時代の集落。古墳後期の祭祀遺構より滑石製模造品が出土。
34	神保富士塚遺跡	古墳前・後期～平安時代の集落。
35	神保植松遺跡	弥生～平安時代の集落および方形周溝基。
36	神保下條遺跡	古墳時代前期の集落、住居より銅鏡が出土。後期古墳2基。埴輪が豊富。
37	多胡蛇黒遺跡	古墳後期～平安時代の集落。
38	矢田遺跡	古墳後期～平安時代の集落。矢田郡に想定。
39	多比良吉野野遺跡	古墳中期～平安時代の集落。

石碑

番号	遺跡名	概要
40	多胡碑	和銅4(711)年多胡郡建郡の記念碑。
41	山ノ上碑および古墳	天武天皇9(681)年の追善供養碑と載石切組積の石室を持つ終末期古墳。

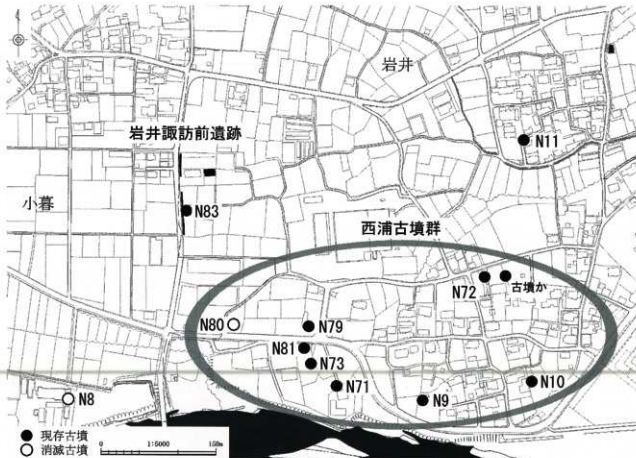
第1表 岩井諏訪前遺跡周辺遺跡一覧

3節 西浦古墳群の概要

本遺跡に近接して西浦古墳群が所在する。本遺跡1号墳は西浦古墳群中の古墳集中地点からは北西へ250mほど離れて立地しているが、本墳以外では本遺跡の直近には古墳は確認できず、本墳が帰属する古墳群が別途形成されている様子はない。そのため、本墳も西浦古墳群を形成した1基の可能性がある。

西浦古墳群では、現在4基の古墳が確認できる。付近には塚状の高まりが認められる箇所もあり、消滅したとされる古墳も含めると、西浦古墳群は9基以上の古墳で形成されていたと考えられる。総覧によればN9号墳以外はすべて円墳である。なお、N9号墳は、墳丘の部分的削平が進んだため現在ではその原形の確認は困難であるが、総覧によると埴輪を出土する前方後円墳であった。西浦古墳群の多くの古墳は総覧未記載で調査も行われていない。現存する古墳もほとんどが削平を受けており、本来の墳丘規模を保っていると考えられるものは少ない。また、いずれの古墳でも所在地近辺には埴輪

や土器類など古墳に伴うと想定される遺物の散布は見当たらない。したがって、ほとんどの古墳において明確な墳形や墳丘規模、埴輪などの外表施設や石室などの埋葬主体部の詳細については不明である。その中においてN72号墳は、墳丘南側を大きく抉られて墳裾は変形しているが、現状で墳丘高3～4mが残存しており、古墳群中の各古墳の本来的な高さを窺わせる。本遺跡1号墳の墳丘高復元の際には一助となり得よう。



第2図 岩井諏訪前遺跡周辺遺跡分布図

番号	墳形	墳丘規模	外表施設 埋葬施設	墳丘残存の有無	総覧記載内容	備考
N8	不明	径4間(約7.2m) 高7尺(約2.1m)	不明	削平	入野村8号墳・丸塚	
N9	不明		不明	不整形に一部残存	入野村9号墳・二子山・埴輪多い	河端山・総覧では前方後円墳
N10	円墳	径4間半(約8.1m) 高6尺(約1.8m)	不明	墳丘一部残存	入野村10号墳・丸塚・石柵は破壊、巨石露出	
N11	不明	径4間(約7.2m) 高7尺(約2.1m)	不明	不整形に一部残存	入野村11号墳・丸塚・石柵残存	金比羅塚
N71	円墳か		不明	墳丘西半残存	記載なし	住宅の崩外で墳丘西側が残存 南側の神社で一部損壊
N72	円墳		不明	墳丘残存あり	記載なし	
N73	不明		不明	墳丘状の高まりあり	記載なし	
N79	不明		不明	墳丘状の高まりあり	記載なし	
N80	不明		不明	削平	記載なし	
N81	不明		不明	墳丘状の高まりあり	記載なし	
N83	円墳	径10～15m(推定) 高約1m(残存)	埴輪なし 未確認	墳丘一部残存	記載なし	本調査報告

※番号は吉井町教育委員会1995『吉井町遺跡地図』記載の番号である。

第2表 西浦古墳群一覧

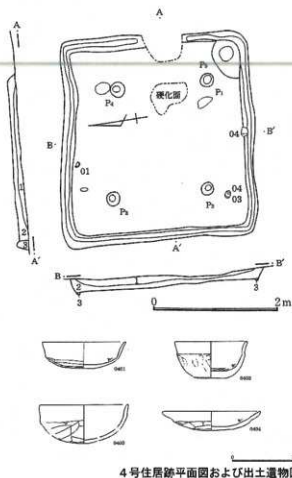
3節 岩井諏訪前遺跡第1次調査（平成8年度）の概要

第2次調査となる本調査区の東隣では平成8年度に第1次調査がおこなわれている。以下に調査成果を概観する。

調査に至る経緯 共同住宅建設の計画に伴い確認調査をおこなった結果、住居跡と考えられる掘り込みが確認された。これを受け開発者と協議をおこなった結果、建物部分のみの発掘調査が実施されることとなった。発掘調査は旧吉井町教育委員会により組織された岩井諏訪前遺跡調査会が実施した。調査対象面積は110㎡であり、調査は平成8年9月24日から同年10月4日までおこなわれた。

検出遺構および遺物 発掘調査の結果、重複するものを含めて堅穴住居跡6軒を検出した。ほとんどの住居跡は調査区内では一部の検出に留まっており、全容は不明である。そのうち1号住居跡と3号住居跡はそれぞれが重複している。1号・3号住居跡ではカマドや炉などの燃焼部は確認していないが、3b住居跡において炉の縁石と考えられる細長い石を検出している。2号住居跡は半分のみを検出であるが、方形を呈すると考えられ、遺構南辺で4.2mを測る。東壁にカマドを持つ。調査区内で遺構の全体を検出した住居跡はわずかに4号住居跡のみである。4号住居跡は3.6m×3.8mの方形を呈し、東壁の中央にカマドを持つ（第3図左上）。4号住居跡の南東隅に重複する土坑1基がある。この土坑は4号住居跡の覆土を掘り込んでいるため4号住居跡よりは新しい。ただし、遺物は出土しておらず詳細は不明である。

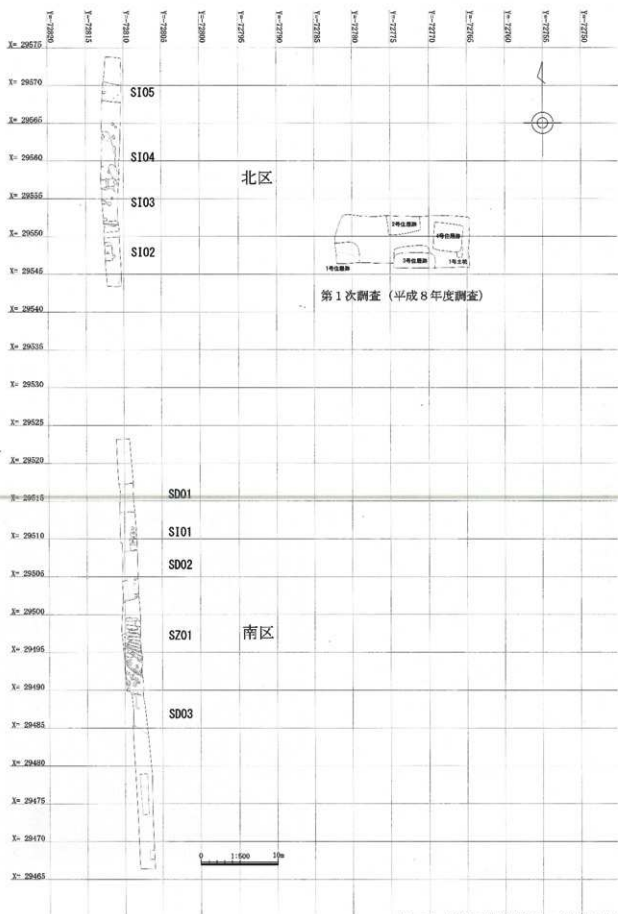
それぞれの住居跡からは土器を中心とした遺物が出土している。これら遺物の分析より、各遺構の年代を、3b住居跡は古墳時代前期、4号住居跡および1b住居跡、2号住居跡は古墳時代後期としている。なお、1a住居跡と3a住居跡は不明だが、1a住居跡は1b住居跡に、3a住居跡は3b住居跡にそれぞれ切られているため、それぞれが1b住居跡あるいは3b住居跡より先行するものと考えられる。



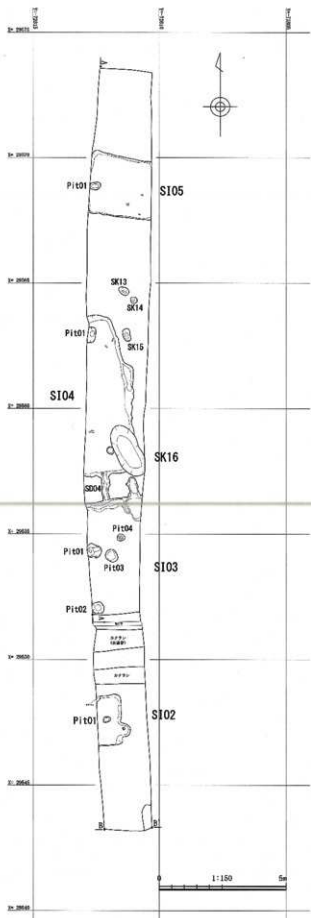
4号住居跡平面図および出土遺物図



第3図 第1次調査住居跡出土遺物および調査区全景（吉井町教委2004より転載）



第4図 岩井諏訪前遺跡第2次調査全体図

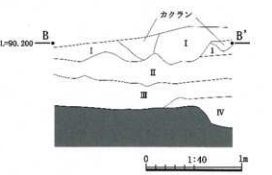


第5図 北側調査区全体図

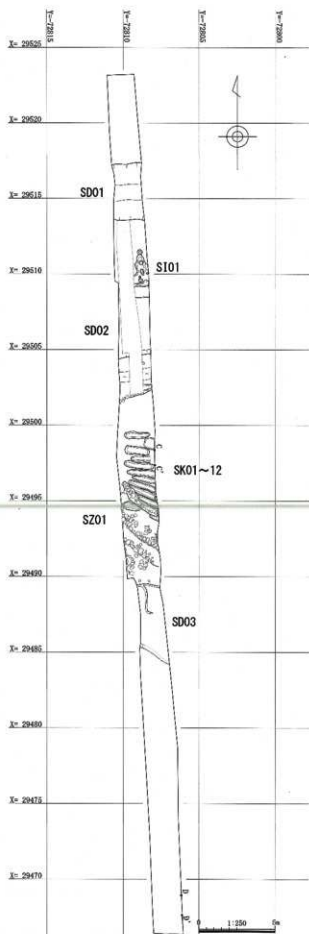


- 土層
- 1 灰褐色 (10YR 4/2) As-A軽石混土層、しまり強、粘性弱。
 - 2 土赤黄褐色 (30YR 4/3) As-A軽石混土層、しまり強、粘性弱。
 - 3 黒褐色 (10YR 3/1) 遺物を含む。しまり強、粘性やや弱。
 - 4 黒褐色 (10YR 3/2) 小礫を含む。しまり強、粘性弱。
 - 5 黒褐色 (10YR 3/2) 遺物を含まない均質な土、遺物を含む。
 - 6 黒褐色 (10YR 3/1) 遺物を含まない均質な土、遺物を含む。
 - 7 黒褐色 (10YR 3/1) 遺物を含まない均質な土、遺物を含む。
 - 8 黒褐色 (10YR 3/2) 灰褐色土粒子を含む。しまりやや強、粘性弱。
 - 9 黒褐色 (10YR 4/2) しまり強、粘性弱。
 - 10 灰褐色 (10YR 4/2) しまり強、粘性弱。
 - 11 黒褐色 (10YR 3/2) 遺物を含む。しまり強、粘性弱。
 - 12 黒褐色 (10YR 3/2) 遺物を含む。しまり強、粘性弱。

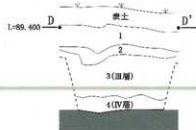
- 13 黒褐色 (10YR 3/2) 遺物、炭を多く含む。住居跡床面上。しまり強、粘性弱。
- 14 黒褐色 (10YR 3/2) 遺物を多く含む。住居跡床面上。しまり強、粘性弱。
- 15 黒褐色 (10YR 3/2) 大きな礫を含む。しまり強、粘性弱。
- 16 黒褐色 (10YR 3/1) しまり強、粘性弱。
- 17 黒褐色 (10YR 3/1) しまり強、粘性弱。
- 18 灰褐色 (10YR 3/4) しまり強、粘性弱。
- 19 黒褐色 (10YR 3/1) しまり強、粘性弱。
- 20 黒褐色 (10YR 3/2) しまり強、粘性弱。
- 21 灰褐色 (10YR 3/4) しまり強、粘性弱。
- 22 黒褐色 (10YR 2/3) 遺物埋没層上。しまり強、粘性弱。
- 23 灰褐色 (10YR 2/3) しまり強、粘性弱。
- 24 黒褐色 (10YR 3/2) しまり強、粘性弱。



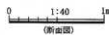
- 土層
- I 表土
 - II 暗褐色 (10YR 3/3) As-A軽石混土層、しまりやや強、粘性弱。
 - III 黒褐色 (10YR 3/1) 遺物を含む。しまり強、粘性やや弱。
 - IV 土赤黄褐色 (10YR 4/3) しまり強、粘性やや弱。
 - V 黄褐色 (10YR 5/6) 砂礫層。しまりやや弱、粘性弱。
 - 1 黒褐色 (10YR 3/2) As-A軽石混土層、しまり強、粘性弱。



土層
 1～5層 黒褐色土層と黄褐色土層が
 脈状に互層となる。
 6層 黒色土層でしまりが強い。



土層
 1 暗褐色土 Aa-A混土層。現地耕作土。しまり弱、
 粘性弱。
 2 にがい黄褐色土 Aa-A混土層。炭化物や黒褐色土ブロック
 が混入する。しまり強、粘性弱。
 3 黒褐色土 腐層に相当。しまり強、粘性弱。
 4 褐色土 IV層に相当。しまりやや強、粘性やや強。



第6図 南側調査区全体図

3章 検出した遺構および遺物

1節 調査の概要

岩井諏訪前遺跡第2次調査では、古墳1基、堅穴住居跡5軒、溝状遺構4条、土坑16基を検出した。また、古墳や堅穴住居跡より土師器・須恵器を中心に遺物が出土している。

2節 基本層序（第5図 B-B'）

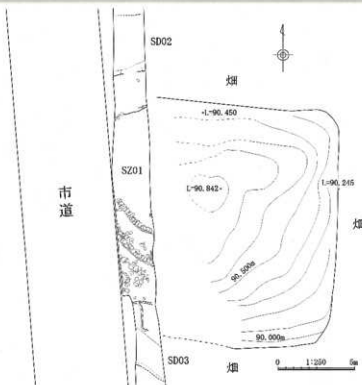
約20cmの表土層の下にはAs-A軽石を混入する暗褐色やにぶい黄褐色の混土層が約30cmある（Ⅰ・Ⅱ層）。現地表下約50cmには40cmの厚みをもったしまりの強固な黒褐色土層がある（Ⅲ層）。現地表下約90cmでやや砂質の褐色土層があり、10～20cmほどの厚みがある（Ⅳ層）。以下は黄褐色味の強い砂礫層が続く（Ⅴ層）。なお、住居跡等の遺構確認面はⅣ層上面である。平成8年度実施の第1次調査とは近接し、連続した地形に立地している。そのため第1次および第2次調査では基本土層の様子は概ね合致している。

3節 検出した遺構および遺物

（1）古墳

1号墳（SZ01：第8図）

調査前の状況 南側調査区において古墳1基を検出した。古墳は調査前にもわずかな高まりとして墳丘の残存が確認できた。墳丘の西側は南北に走る現道の市道によって、周囲三方はネギやウコンなどの畑によって変形が進行しており、結果的に残存する墳丘の形状は長方形を呈している。墳丘上部も削平され本来の高さを有していないと推測される。墳丘南側西寄りの現道付近には準大の自然礫が多量に露出しており、葺石が残存する可能性が想定された。現存する墳丘上および周辺には遺物の散布は少なく、埴輪列など外表施設や埋葬主体部を思わせる痕跡なども認められない。墳丘の西半

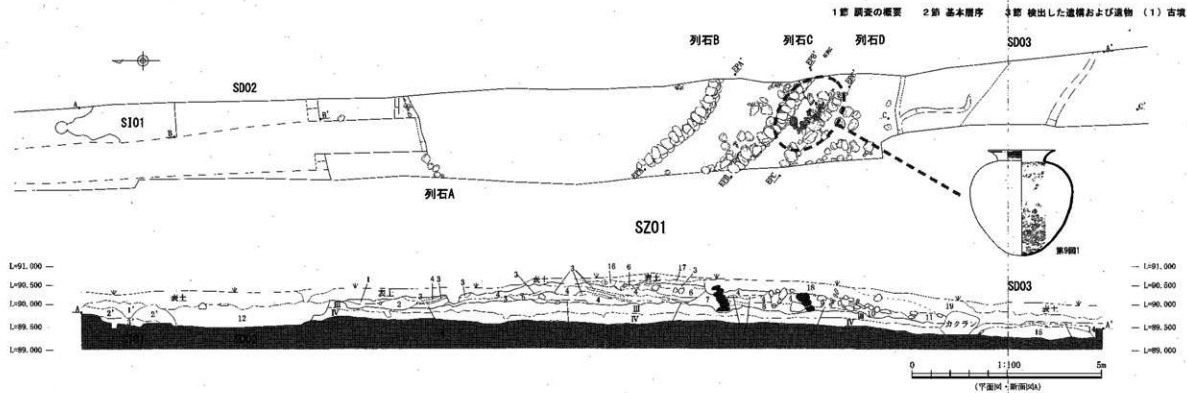


第7図 1号墳現存墳丘測量図

分のうち一部が道路拡幅対象地に該当していたため、トレンチ状の調査区を設定して墳丘を調査した。

墳形・墳丘規模 検出した墳丘の全長は15.5mである。調査区内で確認した残存高は表土を含めても80cm程度であった。墳丘上部の削平は著しいが、表土を除去すると墳丘盛土が一部残存していた。墳丘は、基本土層であるⅢ層（第8図SZ01断面図）の上面に盛土を行っている。盛土はにぶい黄褐色土（同図3層）と黒褐色土（同図4層）の交互する層よりなり、よくしまつていわゆる版築状を呈する。この残存面において対応する3列の石積み列を検出した。これら列石が描く弧より、本古墳は円形であることを確認した。

列石は、墳丘北側において北東から南西へと弧を描く列石Aと、墳丘南側



土層 (SZ01)

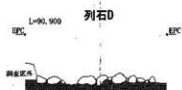
- 1 暗褐色 (10YR 3/2) 黄褐色土層を多量に含む。しまり強、粘性弱。
- 2 暗褐色 (10YR 3/2) 凝灰岩質の砕片を多数に含む。しまり強、粘性弱。
- 3 に近い黄褐色 (10YR 7/4) 珉質砕片を含む。しまりとも強、粘性弱。
- 4 黒褐色 (10YR 2/3) 凝灰岩質の砕片を含む。しまりや中強、粘性やや弱。
- 5 暗褐色 (10YR 3/3) 凝灰岩質の砕片を念珠に含む。
- 6 暗褐色 (10YR 2/3) 黄褐色砂子あり。炭化植物性を含む。しまり強、粘性弱。
- 7 黒褐色 (10YR 2/3) 黄褐色砂子強かに含む。しまり強、粘性弱。
- 8 黒褐色 (10YR 3/2) 4層に近似的な。凝灰質の砕片を少量含む。

- 9 黒褐色 (10YR 2/3) 崩落土。礫を多量に含む。しまりやや中強、粘性弱。
- 10 暗褐色 (10YR 3/3) 8層に近似的な。凝灰岩質の砕片は微量含まれる。
- 11 暗褐色 (10YR 3/3) 小礫含む。しまりやや中強、粘性弱。
- 12 暗褐色 (10YR 3/2) 全体に小礫含む。しまりやや中強、粘性やや弱。S202層土。
- 13 暗褐色 (10YR 2/3) しまりやや中強、粘性弱。S203層土。
- 14 暗褐色 (10YR 2/3) しまりやや中強、粘性やや弱。S203層土。
- 15 黒褐色 (10YR 2/2) 小礫多量。
- 16 褐色 (10YR 4/4) As-A層石罎1層。しまりやや中強、粘性弱。SK05層土。

- 17
- 18
- 19

As-A層石罎1層。
カタラン。礫を多量に含む。
As-A層石罎土層。

- 1' 黒褐色 (10YR 3/2) しまり強、粘性弱。S101層土。
- 2' 暗褐色 (10YR 3/3) 小礫含む。しまり強、粘性弱。S101層土。
- 3' 暗褐色 (10YR 3/4) 凝灰土層。炭化物砕片をそれぞれ強かに含む。しまり強、粘性弱。



土層

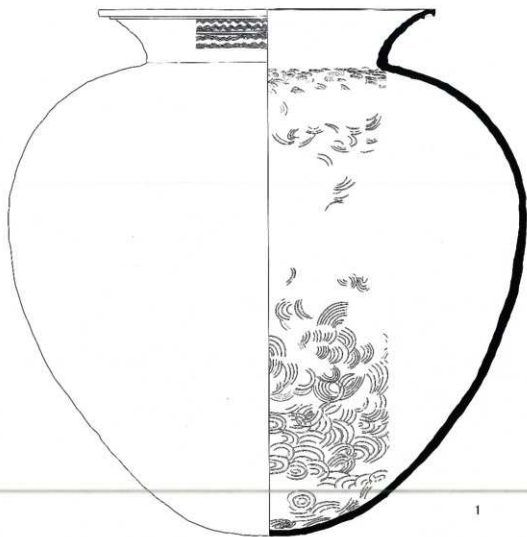
- 1 黒褐色 (10YR 2/2) 遺物を含む。しまり強、粘性やや弱。
- 2 黒褐色 (10YR 2/3) やや大型の礫が散在する。黄褐色シルト少量を含む。しまりやや強、粘性やや弱。
- 3 黒褐色 (10YR 3/2) やや大礫少量を含む。白色細砂粒子を多く含む。しまり強、粘性弱。
- 4 黒褐色 (10YR 2/2) 小型の礫が強かに散在する。白色細砂粒子を少量含む。しまりやや強、粘性弱。

土層

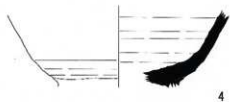
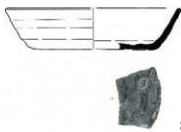
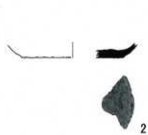
- 1 暗褐色 (10YR 3/1) 礫多量に含む。しまり強、粘性弱。
- 2 に近い黄褐色 (10YR 4/3) As-A層石罎土層。礫多量に含む。しまりやや中強、粘性弱。
- 3 灰黄褐色 (10YR 4/2) As-A層石罎土層。しまりやや中強、粘性やや弱。
- 4 黒褐色 (10YR 3/1) 小礫を強かに含む。しまり強、粘性やや弱。崩の層土。
- 5 暗褐色 (10YR 3/2) 小礫を若干含む。しまり強、粘性弱。IV層に相当。
- 6 褐色 (10YR 4/4) 小礫を若干含む。しまり強、粘性やや強。IV層に相当。
- 7 黒褐色 (10YR 3/1) 礫はない。しまりやや中強、粘性やや強。

0 1:100 5m
断面図 C-D-E-F

第8図 1号墳平面図および土層断面図

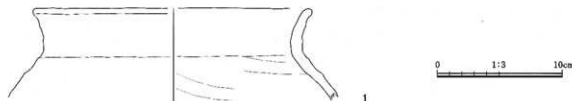


0 1:5 20cm



0 1:5 10cm

第9図 1号墳出土遺物実測図



第10図 2号溝出土遺物実測図

図版番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	①焼成 ③胎土	②色調	成形・整形技法	残存	備考
第9図1 PL. 6	1号墳	須恵器 大甕	口径	71.0	①良好 ③白色粒	②褐色	外面 口縁平行沈線・ 波状文、胴部カキメ 内面 口縁ナデ、胴～ 底部同心円状タケ	2/3
			器高	111.4				
			底径					
第9図2 PL. 6	1号墳	須恵器 坏	口径		①良好 ③白色粒	②灰色	外面 ナデ 内面 ナデ	1/6
			器高	1.1				
			底径	(8.2)				
第9図3 PL. 6	1号墳	須恵器 坏	口径	14.0	①良好 ③白色粒	②灰色		2/5
			器高	3.3				
			底径					
第9図4 PL. 6	1号墳	須恵器 坏	口径		①良好 ③黒色粒	②灰白色	外面 底部ヘラケズリ	1/6
			器高	6.1				
			底径					
第9図5 PL. 6	1号墳	須恵器 坏	口径		①良好 ③	②灰白色		破片
			器高					
			底径					
第9図6 PL. 6	1号墳	土師器 坏	口径		①良好 ③細礫・ 白色粒	②橙色	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	1/6
			器高	1.6				
			底径	10.3				
第10図1 PL. 6	2号溝	土師器 甕	口径	22.0	①やや不良 ぶい橙色	②に ③小礫	外面 口縁ナデ、胴部 ヘラケズリ 内面 口縁ナデ	1/6
			器高	7.4				
			底径					

第3表 1号墳・2号溝出土遺物観察表

において北西から南東へと弧を描く列石B・C・Dをそれぞれ検出した。列石Aはわずか数石が並ぶ状態を検出したのみである。1段目より上位に石段が積まれた痕跡はなく、下層にも列石は埋設されていない。そのため列石Aは当初より1段のみであった可能性が考えられる。

列石Bでは、人頭大から一抱えもある大きく細長い扁平な自然石を使用し、3段ないし4段に積んでいる。礫は墳丘外側となる外弧で小口面を合わせ、墳丘内側に控えを据える。各段は原則的に横目地が通る。検出した列石の中央付近より3段目の下に4段目が追加され、東側へと調査区外に延びる。3段目以下は墳丘盛土内に埋没しており、古墳築造の際には墳丘の構築と並行して列石が構築されたことが想定できる。墳丘断面を確認すると、検出した最上段の1段目より高い位置で礫が確認できるため、本来はさらに段が積まれていた可能性が考えられる。しかし、墳丘上部はすでに失われており、列石が墳丘上に露出していたか確かめることができない。

列石B・C間にはぶい黄橙色土(3層)と黒褐色土(4層)が交互となる墳丘盛土であり、特に下位の層には屑状の細かい凝灰岩粒子が多く混入している。基本土層では確認していない夾雑物であるため、墳丘構築の際に盛土の中に混入したものと考えられる。

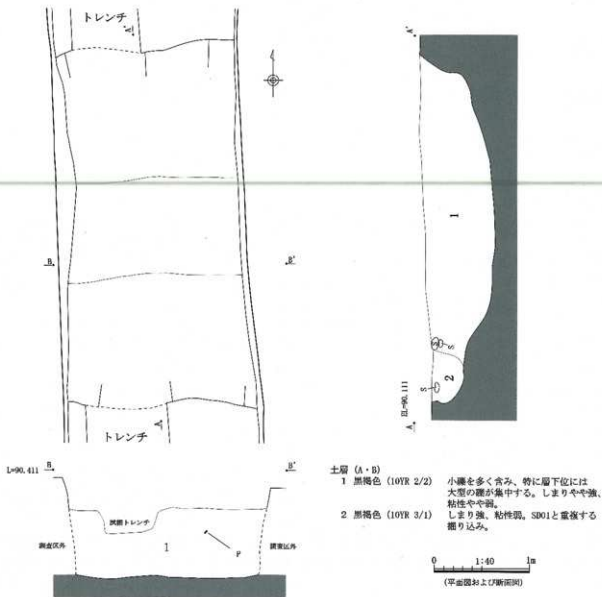
列石Cでは、重複する土坑により一部礫が抜き取られ欠損するなどの乱れが見られるが、人頭大の自然礫を小口面で合わせて3段に積む構造は列石Bと概ね共通する。また、原則として横目地が意識されたようである。列石の南側は盛土ではなく、墳丘外に露出して可視的であったと考えられる。列石

Cは墳丘上段の外縁を巡っていたと考えられる。

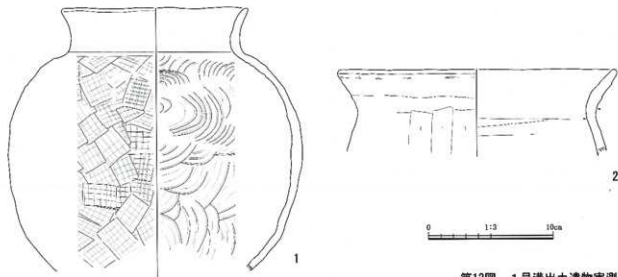
列石Dは1段のみの検出であった。列石Cとは同心円状の弧を描き、列石C・D間では墳丘は平坦となる。列石Dより南側では墳丘が傾斜して3号溝へと下がっていくため、列石C・D間はテラスに該当すると考えられる。列石D南の傾斜面上には人頭大の礫が葺石として葺かれていた可能性がある。

遺物 1号墳からは須恵器を中心に数点の遺物が出土した。第9図1～5は須恵器、6は土師器である。1は須恵器の大甕である。破片の多くは列石C・D間のテラス状平坦部および列石D南側の傾斜面で出土した。大甕片は列石Cより北側では出土しておらず、また崩落した葺石と考えられる自然礫に混ざって出土していることから、大甕は本来、墳頂に据えられていたものが転落して破損したものと想定できる。最大径は胴上部にあり、外面は平行タタキ、内面は同心円文が施される。口縁下には波状文が施され、肩部に補強帯はない。概ね7世紀後半に該当するものとする。2は平底で高台はつかない。3は欠損しているが高台がつく。

周溝 1号墳の南北墳丘際に溝状の落ち込みをそれぞれ検出した。遺構の規模や1号墳との位置関係より、2号溝と3号溝はそれぞれ墳丘の周囲を巡る周溝に該当すると考えられる。ただし、1号墳を全周したかは未確認である。



第11図 1号溝平面図および土層断面図



第12図 1号溝出土遺物実測図

図版番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	①焼成 ③胎土	②色調	成形・整形技法	残存	備考
第12図1 PL. 7	1号溝	須恵器 甕	口径	14.3	①不良か ②淡黄色 ③黒色粒	外面 口縁ナデ、胴部 格子状タキ 内面 口縁ナデ、同心 円状タキ	1/4	
			器高	20.4				
			底径					
第12図2 PL. 7	1号溝	土師器 甕	口径	22.2	①普通 ②明赤褐 色 ③白色粒	外面 口縁ナデ・ユビ オサエ、胴部ヘラケズ リ 内面 口縁ナデ・胴部 ヘラケズリ	1/4	
			器高	6.9				
			底径					

第4表 1号溝出土遺物観察表

2号溝 (SD02) 南側調査区において1号墳の墳丘北側で検出した。遺構の主軸はN-84° -Eでほぼ東西に構築されている。遺構の規模は幅3.8m、深さ50cmである。覆土は黒褐色土を中心とし、大型の礫などを含む。溝は北側で1号竪穴住居跡と重複する。切り合い関係より1号竪穴住居跡より新しいと考えられる。遺物は土師器甕が出土している(第10図)。出土したのは口縁部のみである。内外面はナデ、胴部外面はヘラケズリが施される。

3号溝 (SD03) 南側調査区において1号墳の墳丘南側で検出した。遺構の主軸はN-56° -Wで、北西-南東方向に構築されている。遺構の規模は幅4.6m、深さ40cmである。遺構上層はAs-A堅石を含む土坑状の掘り込みや表土層などで一部カクランを受けているが、覆土は黒褐色土を中心とし、小振りの礫などを含む。遺構内より遺物の出土はない。

(2) 溝状遺構

本調査において溝状遺構4条が確認されている。そのうち2・3号溝は1号墳に伴う周溝であると考えられるため、遺構の詳細は前項に記載した。また、4号溝は4号住居跡と近接して検出したため、4号住居跡の項にて記述した。

1号溝 (SD01: 第11図) 南側調査区において、東西に構築されている溝状遺構の一部を検出した。主軸はN-86° -Eでほぼ東西に構築されている。主軸の傾きはSD02とほぼ同一である。遺構の規模は幅3.7m、深さ70cmである。断面形状は不定形の逆台形を呈している。

遺物は須恵器や土師器が出土している。第12図1は甕である。外面には格子状タキ、内面には同心円文が施されている。器面は脆く、表面は容易に剥離する。内面は褐色だが、外面は淡黄色を呈している。淡黄色の色調は胎土に起因する可能性もあるが、剥離しやすい器面の様相を加味すると、焼成不良による可能性も考えられる。2は土師器甕である。口縁部のみ出土した。

(3) 竪穴住居跡

南北両調査区を合わせ5軒の竪穴住居跡を検出した。

1号住居跡 (SI01: 第13図) 南側調査区北において検出した。遺構の南辺は2号溝、西辺はトレンチとそれぞれ重複して残存しておらず、東辺は調査区外東へと延びる。遺構の遺存状態は良好でなく、正確な形状は不明である。カマドの燃焼部が残存していたのみである。遺構の主軸はN-4°-Wでわずかに西へ傾けるが、ほぼ南北方向に構築される。遺構確認面からの深さは30cmである。

カマド 燃焼部から煙道にかけて住居跡の壁を掘り込んで構築している。袖部の残存はなく、補強材等も確認できない。住居壁から煙道最奥部まで1.3mである。

遺物 遺構から遺物の出土はない。

2号住居跡 (SI02: 第14図) 北側調査区南において検出した。遺構の西壁は調査区外へと続くため未確認である。遺構の主軸はN-88°-Eでほぼ東西方向に構築されている。確認した遺構の規模は東壁で2.0mを測り、東西辺は1.0m以上ある。遺構確認面からの深さは20cmである。

カマド 東壁の南寄りに構築されている。住居壁面より煙道最奥部まで40cmである。土層断面の観察からは焼土や炭化物、灰などの堆積層の確認ができない。

ビット 遺構中央付近でビット状のくぼみを検出した。

遺物 遺構から遺物の出土はない。

3号住居跡 (SI03: 第15・16図) 北側調査区中央で検出した。遺構は東西に調査区外へと延びるため、東西両壁は未確認である。また、南壁はカクランにより未検出である。遺構の主軸はN-3°-Wでほぼ南北方向に構築されている。遺構各辺の全長が確認できる壁は検出していないため規模は不明であるが、東西は2.0m以上、南北は4.6m以上となる。遺構確認面からの深さは20cmである。4号溝と北壁で接するが、覆土の様子から3号住居跡より新しいと考えられる。

カマド 西側の袖部が一部残存する。補強材等は確認していない。焚き口から燃焼部までは60cmであり、焚き口から煙道最奥部まで1.4mである。土層断面の観察からは炭化物や灰などの堆積層は確認できない。

ビット 住居内より4基のビットを検出した。

遺物 土師器を中心に小片が出土しているが、図化できたものは2点のみである。第17図1は坏でほぼ完形の状態出土した。内外面にはナデ、底部はヘラケズリされる。2は高杯の坏部底部へ脚部付近と考えられる。

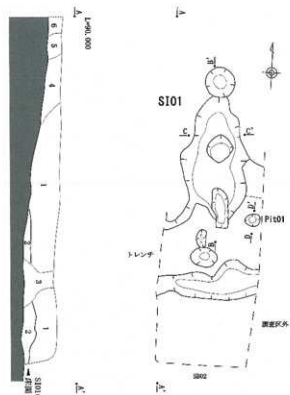
4号住居跡 (SI04: 第18・19図) 北側調査区中央で検出した。遺構は調査区外西へと延びるため全容は不明である。遺構の主軸はN-9°-Wでわずかに西へふれるがほぼ南北方向に構築されている。遺構規模は南北軸で6.2mを測る。西壁を検出していないため東西軸の長さは不明である。遺構確認面からの深さは30cmとなる。遺構南東隅で16号土坑、遺構南壁で4号溝と接している。

カマド・炉 遺構内の北東隅付近の覆土中に微量の焼土粒子が散見されるが、カマドや炉などの燃焼部は確認できなかった。

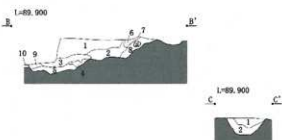
ビット 住居内より2基のビットを検出した。

遺物 住居内からは土師器を中心に多くの遺物が出土した。第20図2は高杯の脚部と考えられる。3～6は土師器坏である。9は甌で、底部は多孔である。第18図1は無頸甕である。2は砥石である。

4号溝 (SD04) 4号住居跡南壁と接して検出した。遺構は幅20cmほどで、3号住居跡と4号住居跡の狭間で長さ1.0mを検出した。深さは10cm内外である。3号・4号住居跡をそれぞれ連結するようにも看取できるが、明確な切り合いは確認できなかったものの、3号住居跡北壁とは重複している



- 土層 (A)
- 1 暗褐色 (10YR 3/4) 焼土粒子僅かに含む。小礫が多い。しまり強、粘性弱。
 - 2 黒褐色 (10YR 3/2) 焼土粒子含む。しまりやや強、粘性やや弱。
 - 3 黒褐色 (10YR 3/1) 礫が若干混入する。しまりやや強、粘性弱。
 - 4 黒褐色 (10YR 3/2) 焼土粒子若干、小礫を僅かに含む。しまり強、粘性弱。
 - 5 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 小礫含む。しまりやや強、粘性弱。
 - 6 暗褐色 (10YR 3/3) しまり強、粘性弱。IV層に相当。



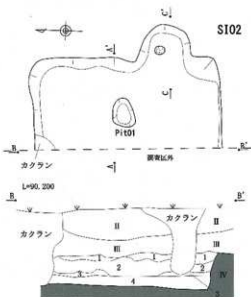
- 土層 (B・C)
- 1 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 焼土粒子、小円礫を少量含む。粘性なし。
 - 2 暗褐色 (10YR 3/3) 焼土粒子中量含む。
 - 3 暗褐色 (7.5YR 3/3) 粘質土層で固く締まる。焼土粒子少量含む。
 - 4 暗褐色 (7.5YR 3/4) やや砂質。焼土粒子僅かに含む。
 - 5 暗褐色 (7.5YR 3/4) 砂質。焼土粒子僅かに含む。
 - 6 黒褐色 (10YR 3/1) 上面からの崩り込み。
 - 7 暗褐色 (10YR 3/3) 2層に近似する。
 - 8 暗褐色 (10YR 3/3) 砂質。焼土粒子を含まない。
 - 9 暗褐色 (7.5YR 3/4) 4層に近似する。焼土粒子中量含む。
 - 10 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘り床か。粘性、しまり強い。



- 土層 (D)
- 1 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘性ややあり、しまりあり。
 - 2 暗褐色 (10YR 3/3) 炭化物粒子含む。粘性なし、しまりあり。



第13図 1号住居跡平面図および土層断面図

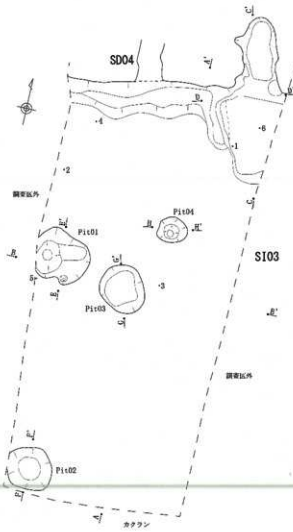


- 土層 (A・B)
- 1 黒褐色 (10YR 2/2) 混入物は少ない。しまり強、粘性弱。
 - 2 黒褐色 (10YR 3/2) 黄褐色土粒子僅かに含む。しまり強、粘性弱。
 - 3 黒褐色 (10YR 3/2) 黄褐色土粒子が多く混入する。住居床面か。しまりやや強、粘性やや弱。
 - 4 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 黒褐色土が混在する。しまり強、粘性弱。

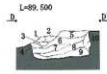
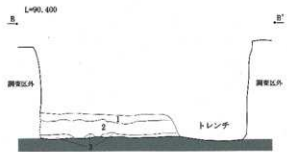


- 土層 (C)
- 1 黒褐色 (10YR 3/2) 焼土を含まない。混入物は少ない。しまりあり、粘性なし。
 - 2 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 焼土粒子を含み、やや赤味がかる。しまりあり、粘性なし。
 - 3 暗褐色 (10YR 3/3) 焼土粒子を少量含む。黄褐色土粒子が混入。しまりあり、粘性なし。
 - 4 暗褐色 (10YR 3/3) 焼土粒子をほとんど含まない。しまりあり、粘性なし。
 - 5 暗褐色 (10YR 3/4) 焼土粒子を含まない。黄褐色土粒子が少量混入する。
 - 6 暗褐色 (10YR 3/3) 全体に赤味がかる。しまりあり、粘性なし。

第14図 2号住居跡平面図および土層断面図



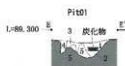
土層 (A・B)
 1 白色細砂子を多く含む。しまり強、粘性弱。
 2 白色細砂子と粘土を若干。焼土、遺物を含む。しまり強、粘性弱。
 3 赤褐色 (10YR 4/2) 質地均一な黄褐色粘土。しまり強、粘性弱。
 4 赤褐色 (10YR 3/2) 全体的に黄褐色粘土。しまり強、粘性弱。
 5 赤褐色 (10YR 3/2) 赤褐色 (10YR 3/1) 焼土粒子層から含む。しまり強、粘性弱。
 6 赤褐色 (10YR 3/1) 焼土粒子層から含む。しまり強、粘性弱。



土層 (C・D)
 1 暗褐色 (7.5YR 3/3) 焼土粒子中量含む。しまりあり、粘性やや強。
 2 暗褐色 (10YR 3/4) 焼土粒子層から含む。しまりあり、粘性やや強。
 3 黒褐色 (7.5YR 3/4) 焼土粒子とまると混入。しまり、粘性弱。
 4 暗褐色 (10YR 3/4) 夾雑物含まない。しまり強、粘性あり。
 5 黒褐色 (10YR 2/3) 焼土粒子層から含む。しまりあり、粘性あり。
 6 暗褐色 (10YR 3/3) 焼土粒子層から含む。しまりやや弱、粘性弱。
 7 暗褐色 (7.5YR 3/4) 焼土粒子層から含む。しまりやや弱、粘性弱。
 8 暗褐色 (7.5YR 3/3) 焼土粒子少量含む。しまりやや弱、粘性弱。
 9 暗褐色 (10YR 3/4) 焼土粒子少量含む。しまりやや弱、粘性なし。
 10 暗褐色 (7.5YR 3/3) 赤味のある粘質土、焼土塊含む。しまり強、粘性あり。

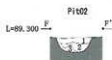
第15図 3号住居跡平面図および土層断面図 (1)

3章 検出した遺構および遺物



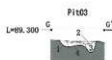
土層 (E)

- 1 褐色色 (10YR 4/1) 壤土、炭化物含む。しまり強、粘性弱。
- 2 褐色色 (10YR 4/1) 黄褐色シルト多量に含む。しまり弱、粘性やや弱。
- 3 褐色色 (10YR 5/1) 黄褐色シルト多量に含む。しまり強、粘性弱。
- 4 黒褐色 (10YR 3/2) しまり強、粘性弱。
- 5 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 黄褐色シルト主体。



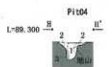
土層 (F)

- 1 黒褐色 (10YR 3/2) しまり強、粘性弱。
- 2 黒褐色 (10YR 3/1) しまり強、粘性弱。
- 3 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 黄褐色シルト主体。しまりやや弱、粘性やや強。



土層 (G)

- 1 黒褐色 (10YR 3/2) しまり強、粘性弱。
- 2 黒褐色 (10YR 3/2) 黄褐色シルトやや多い。しまり強、粘性弱。
- 3 黒褐色 (10YR 3/1) 純土灰子微塵を含む。しまり強、粘性弱。
- 4 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 黄褐色シルト主体。

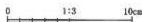


土層 (H)

- 1 黒褐色 (10YR 3/2) 黄褐色シルト僅かに含む。しまりやや弱、粘性やや強。
- 2 黒褐色 (10YR 3/2) 黄褐色シルトを多量に含む。しまりやや弱、粘性弱。
- 3 褐色 (10YR 4/3) 黄褐色シルト主体。しまり弱、粘性やや弱。



第16図 3号住居跡土層断面図(2)



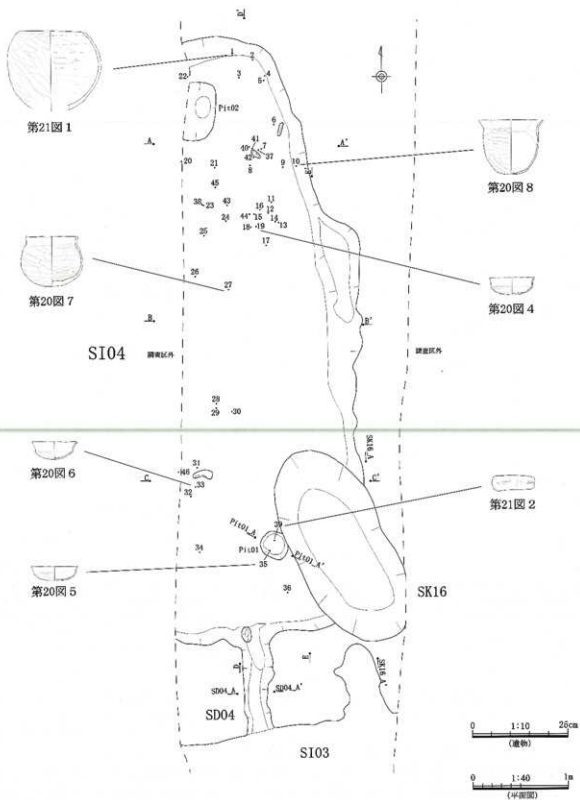
第17図 3号住居跡出土遺物実測図

図版番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	①焼成 ③胎土	②色調	成形・整形技法	残存	備考	
第17図1 PL. 7	3号住居	土師器 平	口径	12.1	①良好 ③赤色粒	②橙色	外面 口縁ナデ、底部 ヘラケズリ 内面 口縁ナデ	ほぼ 完形	
			器高	3.9					
			底径	10.6					
第17図2 PL. 7	3号住居	土師器 高平	口径	3.2	①良好 ③赤色粒	②橙色	内外面 ナデ	1/6	
			器高						
			底径						

第5表 3号住居跡出土遺物観察表

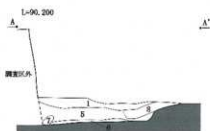
ようである。4号住居跡に付帯する遺構の可能性を考えたい。

16号土坑 (SK16) 北側調査区で検出した。4号住居跡の南東隅と重複して構築されている。切り合い関係より、4号住居跡より新しい。遺構の主軸はN-30°-Wで、北西-南東方向に構築されている。遺構規模は長軸2.2m、短軸1.0mで、楕円形を呈している。深さは最深部で65cmを測る。土坑内からの遺物の出土はない。



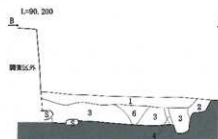
第18図 4号住居跡平面図

3章 検出した遺構および遺物



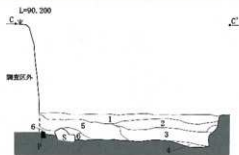
土層 (A・D)

- 1 黒褐色 (10YR 3/2) 白色細砂含む。しまりあり、粘性なし。
- 2 暗褐色 (10YR 3/3) 白色細砂含む (1層より少量)。
- 3 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 黄褐色土主体。
- 4 褐色 (10YR 4/6) 遺構崩壊土か。
- 5 黒褐色 (10YR 3/2) 全体に白色粒子を含む。単大の礫少量が混入する。北側には焼土粒子微量が含まれる。
- 6 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 黄褐色の砂質土主体。
- 7 暗褐色 (10YR 3/4) 焼土粒子わずかに含む。



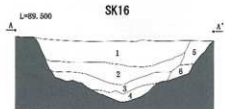
土層 (B)

- 1 黒褐色 (10YR 3/2) 白色細砂中量含む。しまりあり、粘性なし。
- 2 黒褐色 (10YR 4/3) 夾雑物なし。
- 3 暗褐色 (10YR 3/3) 下位には黄褐色土が混入。焼土粒子僅かに含む。しまりあり、粘性ややあり。
- 4 褐色 (10YR 4/4) 地山層に近似する。
- 5 暗褐色 (10YR 3/4) 黄褐色シルトを全体に含む。



土層 (C・E)

- 1 黒褐色 (10YR 3/2) 白色細砂含む。しまり強、粘性弱。
- 2 黒褐色 (10YR 3/1) 黄褐色シルト僅かに混入する。焼土粒子、炭化物を若干含む。しまり強、粘性弱。
- 3 黒褐色 (10YR 3/2) 黄褐色シルトを含む。しまりやや強、粘性弱。
- 4 暗褐色 (10YR 3/3) 黄褐色シルトを多く含む。しまりやや強、粘性やや弱。
- 5 黒褐色 (10YR 3/1) 黒味が強く蒸しり気が少ない。しまり強、粘性弱。
- 6 黒褐色 (10YR 3/1) 黄褐色シルト少量が混入。遺物含む。しまりやや強、粘性弱。



土層 (SK16)

- 1 暗褐色 (10YR 3/3) 白色微細粒子多く含む。しまり強、粘性なし。
- 2 黒褐色 (10YR 2/3) 夾雑物を含まない。しまりあり、粘性ややあり。
- 3 極暗褐色 (7.5YR 2/3) 夾雑物を含まない。しまりあり、粘性ややあり。
- 4 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) シルト質。夾雑物を含まない。しまりあり、粘性ややあり。
- 5 暗褐色 (10YR 3/3) 白色微細粒子少量、黄褐色シルトをそれぞれ含む。しまり強、粘性なし。
- 6 黒褐色 (10YR 2/3) 黄褐色シルト中量含む。しまりやや弱、粘性ややあり。



Pit 01



SD04

土層 (Pit 01)

- 1 黒褐色 (10YR 3/2) しまり強、粘性弱。
- 2 黒褐色 (10YR 3/1) 黄褐色シルト多く混入。しまりやや強、粘性弱。
- 3 黒褐色 (10YR 3/2) 黄褐色シルト多く混入。しまりやや弱、粘性弱。黄褐色シルト完結。
- 4 褐色 (10YR 4/6) しまりやや弱、粘性弱。

土層 (SD04)

- 1 黒褐色 (10YR 3/2) 黄褐色シルト少量含む。しまり強、粘性弱。
- 2 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 黄褐色シルト主体。しまり、粘性やや強。
- 3 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 黄褐色シルト多量を含む。しまり強、粘性弱。

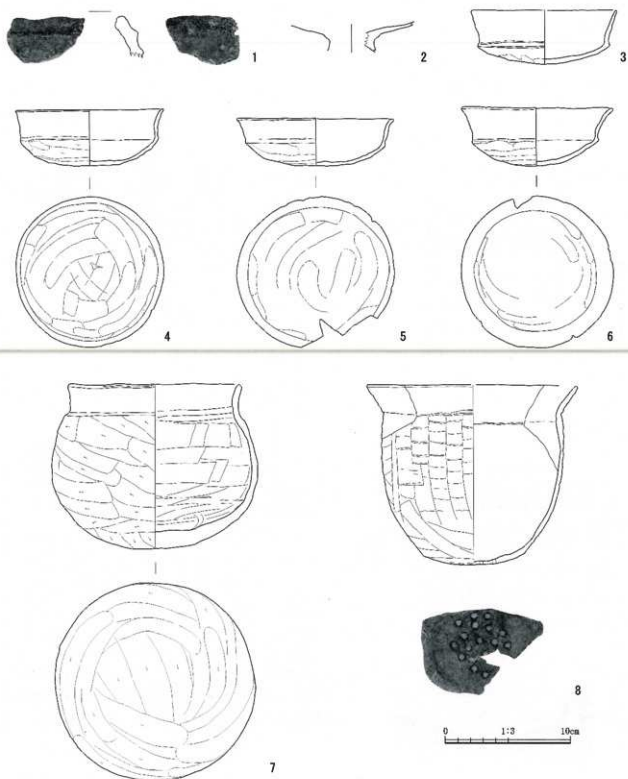


(断面図)

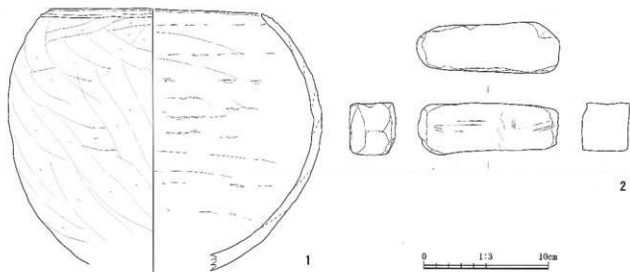
第19図 4号住居跡土層断面図

5号住居跡 (SI05: 第22図) 北側調査区北で検出した。遺構は東西壁の両端がわずかに調査区外へと延びるが、ほぼ全体を検出している。遺構の主軸は $N-82^{\circ}-W$ でほぼ東西方向に構築される。遺構の規模は南北軸で2.4mを測る。遺構の東西壁はわずかに調査区外であるが、東西軸で2.5m前後となる。遺構の形状はほぼ正方形を呈する。遺構確認面からの深さは20~30cmとなる。

カマド・炉 カマドや炉などの燃焼部は確認できなかったが、遺構内の南東隅付近の覆土中や調査区東壁に少量の焼土粒子が散見される。



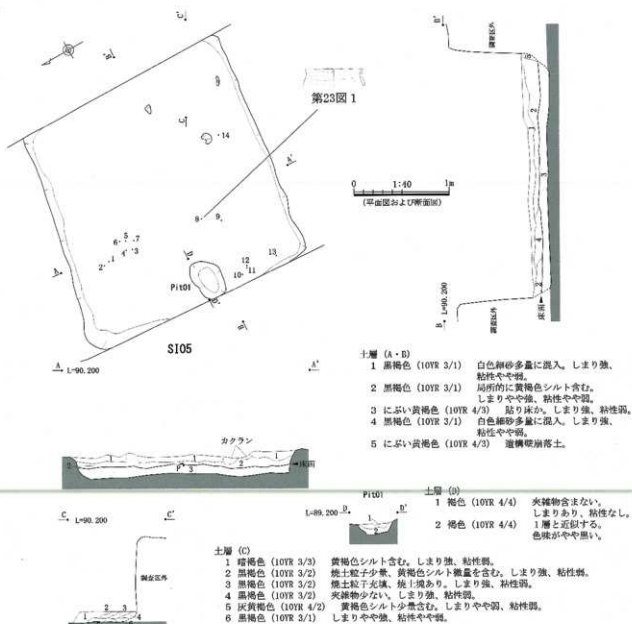
第20図 4号住居跡出土遺物実測図 (1)



第21図 4号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	①焼成 ③胎土	②色調	成形・整形技法	残存	備考
第20図1 PL. 8	4号住居	土器 甕か	口径 器高 底径	①普通 ②にぶい ③赤色粒		外面 ナデ、口縁直下 に微隆起帯 内面 ナデ	破片	
第20図2 PL. 8	4号住居	土師器 高坏	口径 器高 底径	2.5	①良好 ②橙色 ③赤色粒	内外面 ナデ	1/5	
第20図3 PL. 8	4号住居	土師器 坏	口径 器高 底径	11.6 4.3 10.5	①良好 ②橙色 ③赤色粒	外面 口縁ナデ、底部 ヘラケズリ 内面 口縁ナデ	1/4	
第20図4 PL. 8	4号住居	土師器 坏	口径 器高 底径	11.7 4.5 10.5	①良好 ②橙色 ③赤色粒	外面 口縁ナデ、底部 ヘラケズリ 内面 口縁～底部ナデ	完形	
第20図5 PL. 8	4号住居	土師器 坏	口径 器高 底径	12.4 3.8 11.1	①良好 ②橙色 ③赤色粒	外面 口縁ナデ、底部 ヘラケズリ 内面 口縁～胴部ナデ	ほぼ 完形	
第20図6 PL. 8	4号住居	土師器 坏	口径 器高 底径	12.0 4.7 10.1	①良好 ②橙色 ③赤色粒	外面 口縁ナデ、底部 ヘラケズリ後ナデ 内面 口縁～胴部ナデ	完形	
第20図7 PL. 8	4号住居	土師器 (甕か)	口径 器高 底径	13.8 13.2 16.4	①良好 ②橙色 ③細礫・白色粒	外面 口縁ナデ、胴～ 底部ヘラケズリ 内面 口縁ナデ、胴～ 底部ヘラケズリ	完形	
第20図8 PL. 8	4号住居	土師器 甕	口径 器高 底径	16.7 14.4 7.9	①良好 ②橙色 ③赤色粒	外面 口縁ナデ、胴部 ヘラケズリ 内面 口縁ナデ、胴部 ナデ	1/6	底部孔15穴。 外面より穿孔
第21図1 PL. 8	4号住居	土師器 甕	口径 器高 底径	17.0 21.0	①良好 ②にぶい ③赤色粒	外面 口縁ナデ、胴部 ヘラケズリ 内面 口縁ナデ、胴部 輪積圧痕	2/5	
図版番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	石材		特徴	残存	備考
第21図2 PL. 8	4号住居	砥石	長さ 幅	16.0 5.4		擦痕が顕著な面あり	完形	

第6表 4号住居跡出土遺物観察表



第22図 5号住居跡平面図および土層断面図



第23図 5号住居跡出土遺物実測図

図版番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	①猿成 ③胎土	②色調	成形・整形技法	残存	備考
第23図 1 PL. 7	5号住居	土師器 甕	口径 15.1 器高 4.6 底径	①良好 ③白色	②灰黄褐 ③白色粒	外面 口縁ナデ、胴部 ヘラケズリ 内面 口縁ナデ	口縁 1/5	

第7表 5号住居跡出土遺物観察表

ピット 住居内より1基のピットを検出した。

遺物 住居内からは土師器を中心に遺物が出土した。第23図1は甕か壺であろう。口縁部のみ一部が出土した。

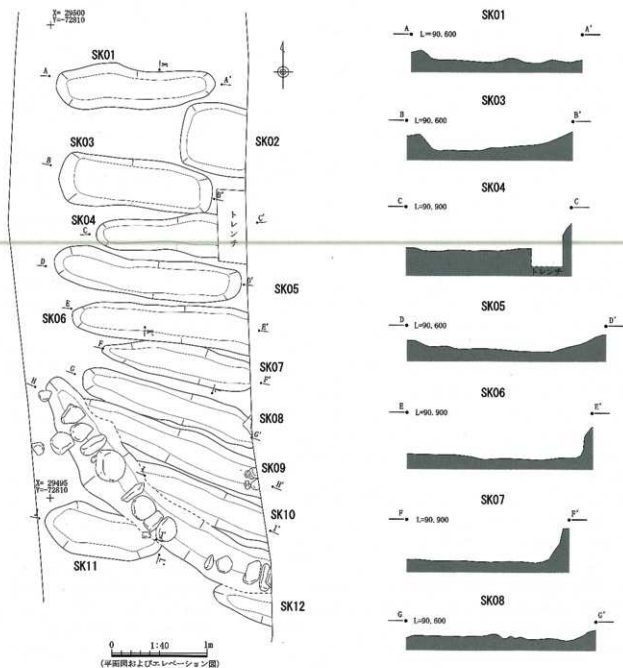
(4) 土坑 (SK01~15: 第24・25図)

本調査において土坑16基を確認した。1~12号土坑は1号墳の墳丘上にて、13~16号土坑は4号住居跡付近にて検出した。なお、16号土坑は4号住居跡と重複しているため、4号住居跡の項に記載した。

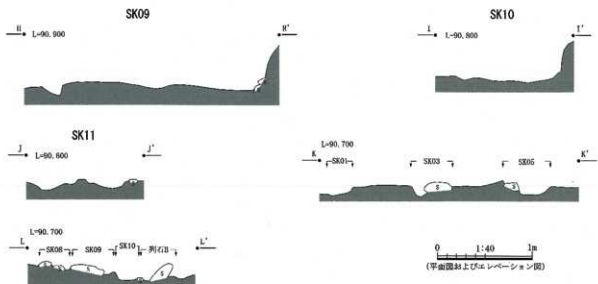
1号土坑 (SK01) 南側調査区で検出した。1号墳の墳丘上に構築されている。遺構の主軸はN-87°-Eでほぼ東西方向に構築されている。遺構の規模は長軸1.7m、短軸0.5mで、深さは10cmを測る。遺物の出土はない。

2号土坑 (SK02) 南側調査区で検出した。1号墳の墳丘上に構築されており、遺構の東側は調査区外へと延びる。遺構の主軸はN-85°-Wでほぼ東西方向に構築されている。確認できる範囲での遺構規模は長軸0.7m、短軸0.7mである。遺物の出土はない。

3号土坑 (SK03) 南側調査区で検出した。1号墳の墳丘上に構築されており、遺構内には一部礫が含まれていた。遺構の主軸はN-83°-Wでほぼ東西方向に構築されている。遺構の規模は長軸1.6m、



第24図 1~12号土坑平面図およびエレベーション図(1)



第25図 土坑エlevation図 (2)

短軸0.5mで、深さは16cmを測る。遺物の出土はない。

4号土坑 (SK04) 南側調査区で検出した。1号墳の墳丘上に構築されている。遺構東端はトレンチにより未確認である。遺構の主軸はN-88°-Eでほぼ東西方向に構築されている。確認できる範囲での遺構規模は長軸1.3m、短軸0.4mで、深さはわずか4cm程度を測る。遺物の出土はない。

5号土坑 (SK05) 南側調査区で検出した。1号墳の墳丘上に構築されており、遺構内には一部礫が含まれていた。遺構の主軸はN-82°-Wでほぼ東西方向に構築されている。遺構の規模は長軸2.0m、短軸0.4mで、深さは12cmを測る。遺物の出土はない。

6号土坑 (SK06) 南側調査区で検出した。1号墳の墳丘上に構築されており、東端は調査区外東へと延びる。遺構の主軸はN-86°-Wでほぼ東西方向に構築されている。確認できる範囲での遺構規模は長軸1.9m、短軸0.3mで、深さは6cm程度である。遺物の出土はない。

7号土坑 (SK07) 南側調査区で検出した。1号墳の墳丘上に構築されており、東端は調査区外へ延びる。遺構の主軸はN-81°-Wでほぼ東西方向に構築されている。確認できる範囲での遺構規模は長軸1.6m、短軸0.4mで、深さはわずか4cmである。遺物の出土はない。

8号土坑 (SK08) 南側調査区で検出した。1号墳の墳丘上に構築されており、東端がわずかに調査区外に延びる。遺構内には一部礫が含まれていた。遺構の主軸はN-72°-Wでやや北にふれる東西方向に構築されている。遺構の規模は長軸1.9m、短軸0.4mで、深さは6cmを測る。遺物の出土はない。

9号土坑 (SK09) 南側調査区で検出した。1号墳の墳丘上に構築されており、遺構西端は1号墳列石Bと重複している。遺構内には一部礫が含まれていた。遺構の主軸はN-69°-Wで北西-南東方向に構築されている。確認できる範囲での遺構規模は長軸1.9m、南北軸0.4mで、深さは8cm程度である。遺物の出土はない。

10号土坑 (SK10) 南側調査区で検出した。1号墳の墳丘上に構築されている。遺構西短は1号墳列石Bと重複する。遺構の主軸はN-70°-Wで北西-南東方向に構築されている。確認できる範囲での遺構規模は長軸1.4m、短軸0.4mで、深さは5cmを測る。遺物の出土はない。

11号土坑 (SK11) 南側調査区で検出した。1号墳の墳丘上に構築されており、遺構東端が1号墳列石Bと重複する。遺構の主軸はN-78°-Wで北西-南東方向に構築されている。確認できる範囲での遺構規模は長軸1.2m、短軸0.5mで、深さは10cmを測る。遺物の出土はない。

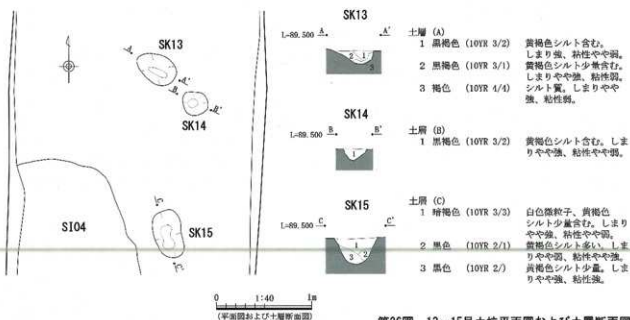
12号土坑 (SK12) 南側調査区で検出した。1号墳の墳丘上に構築されており、遺構北側が1号墳列石Bと重複する。遺構の主軸はN-74°-Wで北西-南東方向に構築されている。遺構の規模は東西軸

0.6m、北軸0.3mで、わずかにくぼんでいる。遺物の出土はない。

13号土坑 (SK13) 北側調査区で検出した。4号住居跡の北東に構築されている。遺構の主軸はN-58°-Wで北西-南東方向に構築されている。遺構規模は長軸0.4m、短軸0.3mで、ほぼ円形を呈している。深さは14cmを測る。遺物の出土はない。

14号土坑 (SK14) 北側調査区で検出した。4号住居跡の北東に構築されている。遺構の主軸はN-89°-Wでほぼ東西方向に構築されている。遺構規模は長軸0.3m、短軸0.2mで、ほぼ円形を呈している。深さは12cmを測る。遺物の出土はない。

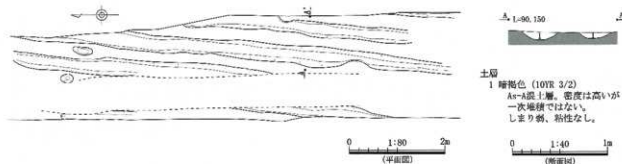
15号土坑 (SK15) 北側調査区で検出した。4号住居跡の北東に構築されている。遺構の主軸はN-16°-Wでやや西にふれるがほぼ南北方向に構築されている。遺構規模は長軸0.5m、短軸0.3mで、不正楕円形を呈している。深さは28cmを測る。遺物の出土はない。



第26図 13~15号土坑平面図および土層断面図

(5) As-A軽石充填遺構

南側調査区において重機による表土除去中に検出した。現地表面から30cmほどの深さで確認した。調査区内では5条を確認しており、いずれの遺構も幅は40cmほどの溝状を呈している。遺構はほぼ均等な間隔をおいて連続して構築されている。遺構主軸は概ねN-5°~7°-Eであり、わずかに東にふれるがほぼ南北に構築されている。遺構の両端は調査区外に延びるため正確な規模は不明であるが、検出した遺構の内最長のもので9.2mを測り、本来はこれ以上の長さを有したと考えられる。覆土はAs-A軽石が充填されていた。これらAs-A軽石は純度は高いが一次堆積ではないと考えられ、一次的に降下



第27図 As-A軽石充填遺構平面図および土層断面図

した後に移動されたものと推測される。遺物は陶磁器の小片が数片出土しているのみである。

このような溝状遺構は市内ひいては県内でも広く散見される(中島2010)。また、As-A軽石が充填された遺構は、溝状のみならず土坑状など様々な形状をとる。市内で調査した例では、代表的なものとして萩原団地遺跡(1993)、東町V遺跡(1996)、栄町I遺跡(1996)など、近年では栄町III遺跡(2003)などの遺跡でAs-A軽石を充填した遺構が検出されている。各調査の担当者および報告者によって若干の解釈や表現に差異があるものの、遺構は概ね田畑等の復旧を目的とした火山噴出物処理あるいは耕作行為の痕跡との考えに集約できるだろう。また、復旧目的以外では、萩原団地遺跡で「浅間山噴出軽石層(A軽石層)に埋没した畝状遺構」(萩原団地遺跡調査会ほか1993; P63)が検出されており、As-A軽石降下に際して埋没した江戸時代の畝跡との認識が持たれている。

これらの前例を加味して検討した結果、本遺跡で検出したAs-A軽石充填遺構は、各々の溝状の遺構がほぼ等間隔に連続して構築された様子から畝間の溝であったと考え、近世期の畝であったと推定する。遺構内に充填されたAs-A軽石が一次堆積でなく降下後に移動された可能性を考慮すると、田畑等の周辺農地の復旧過程で除去された軽石を畝間の溝に充填したものと考えられる。

なお、As-A軽石は1783(天明3)年に噴火した浅間山に起源を持つ軽石であるとされるため(町田・新井2003)、本遺構は1783年の軽石降下と相前後して構築されたものと考えられる。

(6) 遺構外出土遺物

今回の調査では、明確な遺構に伴わずに出土した遺物が数点ある。いずれも小片だが、図示できるものを抽出した。1~3はいずれも土師器である(第28図)。第28図2は浅い体部から口縁がやや直線的に内傾する。3は体部から口縁にかけて弱い稜線を持ち、わずかに内傾する。时期的には住居跡出土資料よりやや新しく、7世紀前半頃に比定されると考えられる。



第28図 遺構外出土遺物実測図

図版番号	出土遺構	器種	量量 (cm)	①焼成 ③胎土	②色調	成形・整形技法	残存	備考
第28図1 PL. 7	遺構外	土師器 環	口径 9.9 器高 7.3 底径	①良好 ③黒色粒	②橙色	外面 口縁ナデ、胴部 ヘラケズリ 内面 口縁へ胴部ナデ	1/10	
第28図2 PL. 7	遺構外	土師器 環	口径 12.0 器高 1.6 底径 (10.3)	①良好 ③白色・黒色粒	②橙色	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	口縁 1/5	
第28図3 PL. 7	遺構外	土師器 環	口径 12.6 器高 2.4 底径	①良好 ③白色・黒色粒	②橙色 ②黒色粒	外面 口縁ナデ、胴部 ヘラケズリ 内面 口縁へ胴部ナデ	口縁 1/8	

第8表 遺構外出土遺物観察表

4章 まとめ

1節 竪穴住居跡の年代と集落展開

第2次調査となる今回の調査では、古墳1基、竪穴住居跡5軒、溝状遺構4条、土坑16基を検出している。本調査区に東隣して平成8年度におこなわれた第1次調査において竪穴住居跡6軒が検出されており、今回の調査では第1次調査で確認した集落の範囲が広がることを確認した。以下では第1次調査の成果と合わせて集落展開を概観したい。

竪穴住居跡の年代 今次調査では、竪穴住居跡5軒を検出しているが、調査区幅が狭いなどの理由により四壁すべてを確認した住居跡はない。そのうちカマドなどの燃焼部を持つと考えられる遺構は1～3号、5号住居跡である。5号住居跡では燃焼部を直接確認することができなかったが、住居跡南東隅でわずかに焼土が散布し、調査区東壁においても若干の焼土が観察されたことからカマドなどの燃焼部であると推測した。4号住居跡では焼土を含めて燃焼部と想定される箇所は確認できなかった。なお、1・3号住居跡はカマドを住居北壁に持ち、2・5号住居跡は東壁に持つ。1・2号住居跡では遺物の出土はほとんどなかったため年代は不詳である。3・4号住居跡からは比較的まとまった量の遺物が出土しており、特に4号住居跡は遺物の完形率は高い。4号住居跡から出土した土師器坏（第20図3～6）は若干丸みを帯びた平底で、比較的浅い体部を持つ。そして体部と口縁とを分ける稜線から口縁は外彎するという特徴が認められる。3号住居跡出土の土師器坏（第17図1）も同様に、比較的浅い体部からやや直線的ながらも外彎気味に口縁が立ち上がる。4号住居跡出土の甕（第21図1）は口縁部が欠損しているが、丸みを帯び胴の中央付近で最大径を持つ。これらの特徴より3号・4号住居跡は古墳時代後期に属する遺構であると考えられる。

平成8年度調査の担当者でもあった茂木由行氏は、吉井地域の資料を中心に古墳時代後期土師器を主体的とする土器の分類と年代比定を行っている（茂木1984）。平成8年度調査においてもその編年観で住居跡の年代を導いている。今次調査出土資料もこの編年に従うと、3号住居跡からは茂木編年Ⅲ期に相当する坏が、4号住居跡からはⅡ～Ⅲ期に顕著な坏がそれぞれ出土している。概ね6世紀後半～7世紀初頭の年代が与えられる。

一方、高崎市三ッ寺Ⅲ遺跡の出土資料を中心に古墳時代後期土器の編年案を提示した坂口一氏の分類（坂口1986）では、3号・4号住居跡出土土師器坏の年代は坂口編年Ⅳ～Ⅴ期（6世紀第2四半期～第3四半期）に相当する。また、4号住居跡出土の甕はⅤ期（6世紀第3四半期）の前後と推定される。両氏の編年案には若干の差があり、遺物により導かれる年代観にズレが生じている。すなわち、今次調査出土資料を両氏の編年と照らし合わせると、茂木氏の分類では6世紀後半～7世紀初頭に相当するが、坂口氏の編年では6世紀中葉となる。編年小期の時間幅の設定の差も一要因となっているようであるが、いずれにしても本遺跡の住居跡出土資料は6世紀中葉～後葉を中心とした時期に相当するものと推定される。

集落の展開 第1次調査で検出した竪穴住居跡6軒のうち、時期不明の2軒はそれぞれがより新しい住居跡と重複している。これら2軒を除く4軒は、古墳時代前期が1軒、後期が3軒とされる（吉井町教委2004）。前期の1軒は炉を持つとされ、後期の2軒は東壁にカマドを構築している。1・2次調査の成果を合わせると、確認された住居跡11軒の内、古墳時代後期の住居跡が半数を占めている。遺構の全容が分かる住居跡の検出が少なく規模などの比較は容易ではないが、同時代性を認めるならば古墳時代後期をピークに集落が展開した様子が看取される。

集落の広がりに関しては、本遺跡南東230mの地点で平成6年度に工場建設に伴う確認調査、また、南120mの地点でも平成7年度に別の工場建設に伴う確認調査がそれぞれ実施されている。いずれの調査でも、古墳や集落を想定させる遺構および遺物の検出は認められなかった。そのため本遺跡の集落

は、南ないし南東へ展開する様相が認められない。本遺跡の立地する地形は今調査の南側で一段下がるため、集落は微高地状の地形に立地することになる。したがって、当該期の集落の南限は調査区のある微高地状地形上で収まると想定される。また、今回の調査に先行して行われた確認調査では今調査区の北側では集落遺構は確認されておらず、集落が北側へと展開する可能性については未だ不明瞭である。集落展開範囲の全容解明については本遺跡周辺での更なる調査を待つ必要があるが、第1次調査で地点として確認されていた集落が展開する様相を、部分的ながらも確認できたことは今調査の成果である。

2節 1号墳の墳丘構造について

今回の調査では、A～Dの列石を検出した。特に列石Bは墳丘外面には露出させないで墳丘内に埋没させる、いわゆる「墳丘内埋没石積施設⁽¹⁾」と考えられる。以下では墳丘断面や列石の様相から1号墳の構築手順の復元を試みたい。

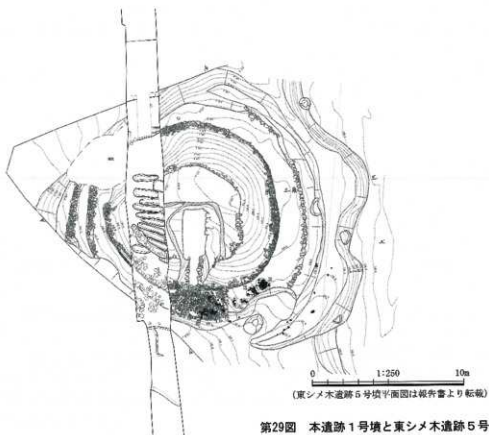
古墳立地の地形的環境 今回の調査地点は北より南へとゆるやかに傾斜した鏡川左岸の馬庭段丘上に位置している。古墳立地地点は鏡川まで直線距離で300m程度であり、調査地点付近も鏡川へと若干下降している。古墳は地山となる黒褐色土層（第8図Ⅲ層）の上に直接構築されている。この地山層の上は北から南へと若干傾斜しており、断面で確認する限りは地山を水平に整地した痕跡は認められない。

墳丘の構築工程 古墳の中心は列石Bの北東にあると想定できるため、列石Bの北が墳丘内側、南が墳丘外側となる。墳丘構築の第一段階として、まずは墳丘中核に小さな丘状の高まりを構築したと考えられる（以下、便宜的に「一次墳丘」と呼称する）。墳丘断面を観察すると列石Bのすぐ内側には黒褐色土がブロック状に分層できる箇所があり、それより内側は黒褐色土とにぶい黄褐色土による版築状の交互層が山なりとなる。列石内側のブロック状土層は石積を支えているようであり、版築状交互層より下層となる。列石Bは墳丘盛土の流出防止が構築目的の一つと考えられ、中核小丘の構築と並行して列石構築が行われたと考えることが妥当であろう。一次墳丘の版築状盛土下位層には粉末状の凝灰岩片が混入することから、石室など埋葬主体部の構築と一次墳丘の中核小丘構築は同時進行であったと想定される。

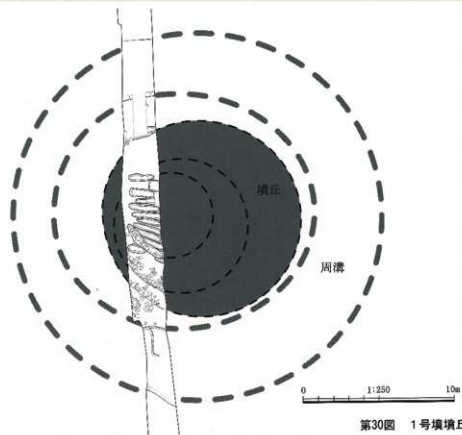
一次墳丘外縁の列石Bの外側には列石Cが構築され、新しく墳丘が構築される（以下、便宜的に「二次墳丘」と呼称する）。列石B・C間には版築状の交互層による盛土がおこなわれる。列石Cは列石Bと同様に墳丘側に内斜して積まれているが、列石Bの内側のようなブロック状土層が観察されない。そのため、列石Cの構築と二次墳丘構築の前後関係は定かではないが、やはり墳丘盛土流出防止の観点から、二次墳丘構築に先行するか並行して構築されたと考えられる。

今回の調査では埋葬主体部の確認はできなかったため、列石と埋葬主体部との構造上の関係性については明確ではない。しかし、列石Bは一次墳丘の外縁を巡り、その後二次墳丘の構築に伴い墳丘盛土内に埋没し外部から目視できない「墳丘内埋没石積施設」であったと考えられる。類似例から列石Bが埋葬主体部との接点において石室壁体に取り付いた可能性が考えられる。列石Cはいわゆる外護列石に相当し二次墳丘の外縁を巡ったものと想定される。前庭構造があれば前庭に接続したであろう。

「付け基壇」の可能性 列石C・D間には多量の礫が存在した。これは完成した墳丘の外側にさらに基壇状の墳丘を付する「付け基壇」の可能性が想定される。しかし、この多量の礫は列石Dを超えて南側の傾斜面にまで広がり、また列石C・D間で多量に出土している須恵器大甕片も列石Dより南の礫層中より出土する。このことから須恵器大甕は出土位置よりも高位から転落して破損した可能性が高く、甕石と共に墳丘上部より崩落したものと考えられる。「付け基壇」などの古墳構築段階の施設である可能性を残しつつも、現況では列石C・D間の礫集中層を墳丘面に葺かれた甕石の崩落によるものとしておきたい。



第29図 本遺跡1号墳と東シメ木遺跡5号墳比較図



第30図 1号墳墳丘想定復元図

埋葬主体部の予察 本墳に関しては2mの調査区幅に制限され一部のみの調査となったため、3列の列石⁽¹⁾および周溝が墳丘を全周したかは未確認である。特に墳丘北側での列石の検出は乏しく、列石Aの挙大の礫わずか4石を検出したに留まる。列石の描く弧の検討や礫のレベルの比較より、列石Aに対応する石列は列石Cと考えられる。しかし、列石Aで使用されている礫は列石B・C・Dと比して小振りであり、複数段が積まれていた痕跡もない。先年の消防施設建設に際して墳丘北側付近で石探りがおこなわれたとの地元住民による情報を加味しても、列石B・C・Dの南側列石グループとの差は著しい。また、列石Cでは中央から東に石段が1段加えられて4段となることから、列石の構築に際しては墳丘南側がより重点的におこなわれているようである。本調査区内で石室などの埋葬主体部の検出はなかったが、列石のあり方などから南側が本古墳の正面として認識されていたと推測できる。

また、墳丘盛土内からは粉末状の凝灰岩屑片が検出されたことから、墳丘形成と並行して凝灰岩が加工され、その屑片が盛土内に混入したものと考えられる。これは一次・二次墳丘のいずれの盛土にも含まれており、墳丘の段階的な構築に並行して石材の加工が進行していたことを物語る。本古墳では埋葬主体部の確認はできていないためあくまで推測となるが、これら凝灰岩屑片は横穴式石室の構築材⁽²⁾として加工された残滓と考える。

本古墳では墳丘上部は削平されているため、埋葬主体部の残存そのものが危ぶまれる。しかし、将来的に埋葬主体部の検出があった場合、それは横穴式石室である蓋然性が高く、かつまた、その開口部は本調査区の東隣にある可能性が高い。

構造の類似する古墳 本古墳のように「墳丘内埋没石積施設」を持つ構造の古墳は群馬県下のみならず周辺近県にも類例が認められ、群馬県にのみ特徴的な構造ではないとされる(青木2007、加部2001)。吉井地域に焦点を絞れば、鐮川右岸に展開する東シメ木遺跡1・5号墳や安坪古墳6・12・13号墳などが類似例として挙げられよう。一例として、本古墳より鐮川を隔てて南西4kmとやや離れている東シメ木遺跡では、平成8年度から始まった調査では円墳5基が確認され、1号墳と5号墳が「墳丘内埋没石積施設」構造を持つことが明らかとなった。1号墳は径14.4～14.6mの2段築成であり、埋葬主体部に南南東に開口する横穴式石室を持つ。埴輪は樹立されず、墳丘には須恵器大甕が複数個体確認されている。5号墳は推定墳径16.8mで2段築成、南に開口する横穴式石室をからは多くの遺物が出土した。やはり埴輪を持たず、墳丘からは須恵器大甕が出土している。本遺跡1号墳と墳丘規模や墳丘構造など共通要素が多い特徴が見出せる(第29図)。

一方、鐮川左岸馬庭段丘の東に立地する本遺跡周辺において調査された古墳は少ない。また、調査の中で検出した古墳は多くの場合墳丘がすでに削平され、わずかに周溝などその痕跡を確認するに留まるなど、墳丘構造の全容が明らかな事例が少ない。そのため「墳丘内埋没石積施設」構造をとる古墳は、本遺跡周辺では山名古墳群中の前方後円墳・山名伊勢塚古墳の例が見られるに過ぎない。本遺跡1号墳と構造上の比較検討を行うためのデータが得られる好例が周辺にはないため判断を避けるが、鐮川左岸の本遺跡周辺における「墳丘内埋没石積施設」構造を持つ古墳の築造方法の普遍性の検討については課題とし、以後の調査事例の増加に期待したい。

1号墳の想定復元 以上のことから、本古墳は墳丘内に埋没した列石を持つ2段築成以上の円墳であることが想定される。墳丘規模は径15m前後に復元することができ、埴輪を樹立しない可能性が高い。また、埋葬主体部は未確認ながら横穴式石室と考えられ、石室構築材には切石を使用していた可能性もある。本古墳の構築時期は、墳丘上部よりやや時期の下る須恵器も出土しているため明確にはし得ないが、崩落した墓石中から出土した須恵器大甕に近い時期を想定して7世紀後半以降とした。

註

- (1) 墳丘外に露出せず墳丘内に埋設している列石は、石室や墳丘を構築する際の段階的な構築の工程単位として考えられる。また、封土崩落防止などの構造上の利点以外に観念的・祭祀的な側面の可能性も排除できない（右島ほか2003）。
- (2) 列石Aと列石Cは同一の石列と考えられるため、古墳を巡った列石はA・CとB、Dの3列と推定される。
- (3) 地元住人によると、現存墳丘の墳頂にはかつて加工された石材が存在したとすることである。現在では確認はできないが、墳丘盛土内で検出した粉末状凝灰岩屑片を加味して、本古墳の埋葬主体部が凝灰岩の加工材を使用した横穴式石室であった可能性は十分に考えられる。

参考文献

- 青木敬2003『古墳築造の研究 墳丘からみた古墳の地域性』六一書房
- 青木敬2008「群馬県下における後・終末期古墳の墳丘構築法：山名伊勢塚古墳と周辺の事例を中心にして-」
『山名伊勢塚古墳 高崎市文化財調査報告書第223集』
- 坂口一1986「古墳時代後期の土器の編年 -三ツ寺田遺跡を中心とした土師器と須恵器の平行関係-」
『群馬文化』第208号 群馬地域文化研究協議会
- 高崎市遺跡調査会1996『栄町Ⅰ遺跡発掘調査報告書』高崎市遺跡調査会報告書第43集
- 高崎市教育委員会1996『東町Ⅴ遺跡』高崎市文化財調査報告書第146集
- 高崎市教育委員会2003『栄町Ⅲ遺跡』高崎市文化財調査報告書第187集
- 中島直樹2010「1783上州の田畑」『比較考古学の新天地』同成社
- 萩原団地遺跡調査会・高崎市教育委員会1993『萩原団地遺跡』高崎市文化財調査報告書第194集
- 町田洋・新井朋夫2003『新編火山灰アトラス』東京大学出版会
- 右島和夫1992「Ⅱ. 神保下條遺跡 Ⅰ. 遺跡の立地と環境」『神保下條遺跡』
脚群馬県埋蔵文化財調査事業閉調査報告書第137集・関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
- 右島和夫・土生田純之・曹永敏・吉井秀夫2003『古墳構築の復元的研究』推山閣
- 茂木由行1984「群馬県における鬼高式土器の編年」『群馬考古通信』第9号 群馬県考古学談話会
- 吉井町誌編さん委員会1974『吉井町誌』
- 吉井町教育委員会2004『岩井諏訪前遺跡発掘調査報告書』
- 吉井町教育委員会2005『東シメ木・多胡松原遺跡発掘調査報告書』

写真図版



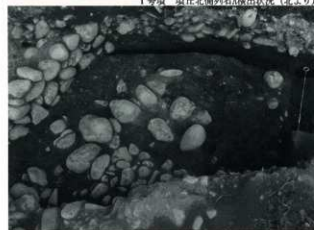
1号墳 道路 (北西より)



1号墳 塚丘北側列石A検出状況 (北より)



1号墳 塚丘南側崩落瓦石検出状況 (南より)



1号墳 列石C・D検出状況 (西より)



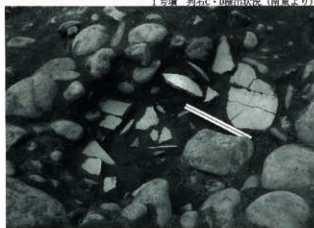
1号墳 列石C検出状況 (南西より)



1号墳 列石・D検出状況 (南東より)



1号墳 列石・D検出状況 (南より)



1号墳 遺物出土状況 (西より)



1号墳 墳丘部土中の縦紋甬器片検出状況 (東より)



1号墳 遺物出土状況 (西より)



1号墳 発掘作業風景 (西より)



2号墳 完結状況 (北より)



2号墳 遺物検出状況 (南西より)



1号溝 光相状況 (北東より)



1号溝 遺物除去状況 (南より)



1号溝 遺物出土状況 (北西より)



1号住居跡 光相状況 (西より)



2号住居跡 光相状況 (南東より)



2号住居跡 カマド断面 (南より)



3号住居跡 光相状況 (北東より)



3号住居跡 カマド光相状況 (南より)



4号住居跡 完照状況(北東より)



4号住居跡 遺物検出状況(南東より)



4号住居跡 遺物出土状況(北東より)



4号住居跡 遺物出土状況(西より)



5号住居跡 完照状況(南西より)



5号住居跡 遺物検出状況(南東より)



5号住居跡 掘り方検出状況(南西より)



5号住居跡 焼土堆積状況(南東より)



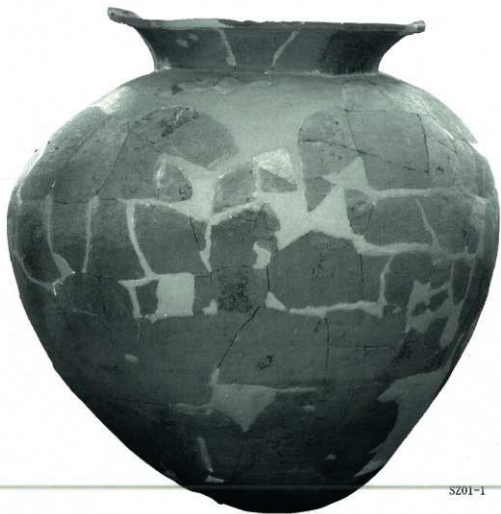
北園調査区 全景（北より）



As-A砒石充填道構 輸出状況（南東より）



As-A砒石充填道構 光輝状況（北より）



SZ01-1 S=1/8



SZ01-2



SZ01-3



SZ01-4



SZ01-5



SZ01-6



SD02-1

S=1/3

1号墳・2号溝出土遺物



SD01-1



SD01-2

1号溝出土遺物



SI03-1



SI03-2

3号竪穴住居跡出土遺物



SI05-1

5号竪穴住居跡出土遺物



遺構外-1



遺構外-2



遺構外-3

S=1/3
遺構外出土遺物



SI04-01



SI04-02



SI04-03



SI04-04



SI04-05



SI04-06



SI04-07



SI04-09



SI04-08



SI04-10

報告書抄録

ふりがな	いわいすむまえいせき							
書名	岩井諏訪前遺跡 2							
副書名	市道小暮・小津線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第278集							
編著者名	山本 ジェームズ・赤見 義和							
編集機関	高崎市教育委員会							
所在地	群馬県高崎市高松町35番地 1							
発行年月日	平成23年 3 月 31 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘理由
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
いわいすむまえいせき 岩井諏訪前遺跡	ぐんまけんたかしまし 群馬県高崎市青井町字岩井	102020	477	36° 15' 48"	139° 01' 23"	20100712 ～ 20100914	190㎡	遺跡拡張
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
岩井諏訪前遺跡	古墳・集落	古墳時代・近世	円墳1、竪穴住居跡5 溝状遺構4、土坑16		土師器、須恵器			

高崎市文化財調査報告書第278集

岩井諏訪前遺跡 2

市道小暮・小串線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

印刷・発行日 平成23年3月31日

編集・発行 高崎市教育委員会
群馬県高崎市高松町35番地1

印刷 荒瀬印刷株式会社